

# 川の民話集

創立30周年記念

信

# 川の民話集

## はじめに

昔の人々は川に對して、飲み水や魚などの恵みへの感謝と大きな洪水により家や田畠が流されないよう恐れを抱いて生活していました。

そして、このような生活と地域の気候や地形などから、その地方に「川にまつわるさまざまな民話」が誕生しました。

この「川の民話集」は、当財団で昭和五一年から発行している小学生向

けの小冊子「川の本」に掲載された三〇話を集めて紹介するものです。

この民話を読みすすめると、川と共に暮らしてきた人々の思いや姿が見えてくるでしょう。そして、皆さんが川を大切にしようという気持ちを持つてもらい、川の学習や川や水辺での活動のきっかけとなることを願っています。

平成十八年一月

財團法人 河川環境管理財團

理事長 鈴木藤一郎

# 川の民話集——もくじ

はじめに

民話について

ひがしにほん	東日本の民話
ほつかいどう	北海道
とうほく	東北
かんどうちほう	関東地方の川
かわ	
カムイコタン物語	（ものがたり）
ほつかいどう	（北海道）
いしかりがわ	石狩川
（はつかいどう）	（十勝川）
（あおもりけん）	（岩木川）
（いわきがわ）	
（はつかいどう）	（青森県）
（とかちがわ）	（十勝川）
（かみ）	（神さま）
（かみ）	（カツバ）
い	ミンツチのむこ入り
い	（北海道）
い	（十勝川）
8	10
14	

中日本の民話

北陸中部近畿地方の川

王瀬の長者	（新潟県）	おうせ
笛吹川の悲しい音色	（山梨県）	ちようじや
天竜かつばのいちだいじ	（長野県）	てんりゅうかつば
天竜川	（長野県）	てんりゅうがわ
天竜川	（長野県）	てんりゅうがわ

## 西日本の民話

# 中国 四国 九州 地方 の 川

はんさき物語	(岡山県 旭川)	94
やまたのおろち	(島根県 岩(いわ)広島県(ひろしまけん)太田川(おおたがわ))	102
きつね岩	(島根県(しまねけん)徳島県(とくしまけん)吉野川(よしのがわ))	106
ゆめつげ地蔵	(島根県(しまねけん)太田川(おおたがわ))	106
ひょうげまつり	(香川県(かがわけん)香東川(こうとうがわ))	120
たぬきの紙すき	(高知県(こうちけん)仁淀川(にんだんがわ))	120
筑後川と五庄屋どん	(福岡県(ふくおかけん)筑後川(ちくごがわ))	120
ひとつくわばり	(福岡県(ふくおかけん)嘉麻川(かまがわ))	122
なたとり淵	(宮崎県(みやざきけん)田原川(たはるがわ))	126
かつぱの九千坊	(熊本県(くまもとけん)球磨川(くまがわ))	129

# かわ　みんわ 川の民話とは。

ここに集めたお話の中には、こわい妖怪がでてきます。おそろしい竜があはれたり、タヌキやカッパもでてきます。昔ばなしのようであつたり、伝説のようであつたりもしますが、どのお話の中にも必ず川がでてきます。そして川がおこす洪水とたたかつたり、水不足に苦しんだりしながらも、川と共にくらしててきた人々のすがたが、ひとつ一つの話の中にひそんでいます。そこで「川の民話集」と名付けました。

民話には、昔ばなし、伝説、世間話など、いろいろな

分類がありますが、それらをひつくるめて、一口でいえば人々の暮らしの中から生まれ、口から口へと伝えら

れてきたのが民話です。本当にあつた話もあれば、空想的な話や、そのどちらともつかない話などさまざまです。しかし、たとえ空想的な話であつても、そのうら側に本当にあつたことが、かくされていることもあります。東日本の民話に「カメとウナギの合戦」が紹介されています。江合川の主の大ガメと、鳴瀬川の主の大ウナギとが合戦をする話です。大岩のような大ガメと、大蛇のような大ウナギなんているわけがない、こんな話はウソだと思うかも知れません。

ところが話に出てくる土地を訪ねて、一本の川の現在のすがたや、その地に残る資料などを調べてみると、昔、味わえることでしょう。

この一本の川はある部分がくつつくように流れています。そこで川の水が入り乱れ、たびたび洪水をおこしていたらしいのです。そうしたことから、大ガメと大ウナギの合戦とは、実は二本の川の流れがぶつかりあつておこす洪水の話だということがわかつてきます。このように、空想と思える話でも、本当にあつたことがらが、表現をかえて語られていることがあります。

人々がくらしの中の経験をとおして、こうありたいと願つたり、こうすることをしては駄目だと考えたり、感謝したり、あるいは恐れたり、そうした思いがいろんな形で表現され語り伝えられてきたのが民話です。

この本では、それぞれの民話のあとに、話の中にひそむ人々の思いや、そこに出てくる川を、解説してあります。

この本で紹介する「川の民話」は、あちらこちらと、日本中の川を訪ね歩き、その土地のお寺で話を聞いたり、図書館などの資料からさがし集めたものですが、話の中には川名が出ていないものや、一つの話でも、資料によつては、いくらか内容がちがうものもありました。それらを読みあわせた上で、できるだけ元の話の内容をくずすことなく、しかも川と人とのかかわりが、よりわかりやすいように再話したものなので、必ずしも元の話のままでないことを付け加えさせていただきます。

中村 信

自然科学繪本作家  
グラフィックデザイナー



# カムイコタン物語

北海道

石狩川

むかし、むかし、北海道一ながい石狩川がまだ  
みじかかったころ、旭川というあたりに石狩川の  
河口がありました。まわりは、けわしい山がせま  
つていて、そのわずかな平地にアイヌの人たちの  
山がせました。村カムイコタンがありました。

カムイコタンから山の方へ行くときは、丸木舟  
で石狩川をさかのぼります。川ではサケをとつた  
り、山に入つてシカなどを狩りします。どんな山  
おくへ入つても川にそつていればまよわずにすみ  
ました。海へ出かける時も、カムイコタンのすぐ  
先は海でしたから、やはり丸木舟で出かけました。  
海といつても広い入江だったので、波はおだや  
かで舟はすいすいと、こぎ進めることができます。  
た。山の幸にも、海の幸にも恵まれたカムイコタ  
ンの人たちのくらしは豊かでした。

アイヌの人たちは、どんなものにも神がやどる  
と信じて、いつも感謝の心を忘れません。カムイ  
というの、アイヌ語で神さまのこと、コタンと  
ンの人たちのくらしは豊かでした。

いうのは村のことです。カムイコタンというのは  
神さまのいる村という意味でした。

カムイコタンの人たちは、石狩川の守り神は、  
川底深くすんでいるチヨウザメでシャメカムイと  
よび、山の守り神はクマで、ヌプリコカムイとよ  
んでおりました。

舟をだすときも、帰ってきたときも、舟べりを  
カイでトントントントとたたいて、神さまに「あり  
がとう」と感謝のあいさつをします。そうしてい  
ればいつも無事でした。カムイコタンの人たちは、  
こうして平和にくらしていたのです。

ところが、あるときから、ようすがおかしくな  
つてきたのです。あれほどいた魚がとれなくなつ  
たり、こどもが川でおぼれ死んだり、いやなこと  
がたびたび起るようになつたのです。村の長老  
はなんとかしなければと、川の守り神と山の守り  
神に祈りをささげていましたが、やがてこまつた  
顔でいました。



「たいへんなことになつた、悪い神ニチエネカムイがコタンにやつてきただし」

いやなことがおこるのは悪い神のせいでした。

川の守り神シヤメカムイも、山の守り神ヌプリコカムイも、

悪い神をおいだそうとして、たたかいが、はじまりました。

それはそれは、すさまじいものでした。山は大地震のように

グラグラゆれてくずれ、川は滝のようなしぶきをあげて、あ

れくるいました。わるい神ニチエネカムイは、おそろしい力

であればまわります。さすがの川の神も山の神も負けそうになつてきました。

ちょうどそのころ、となりの村ソラチ（空知）にアイヌの

英雄シヤマイクルが遊びに来ていました。知らせを聞いたシ

ヤマイクルは

「それはたいへんだ、わしがやつづけてやる」

と、カムイコタンにかけつけてくれました。シヤマイクルは

あれくるう悪い神ニチエネカムイに向かつて刀をふりかざし切りかかつていきました。ピュンピュンと刀がはらわれるたびに悪い神が切りさかれます。

これには悪い神もかなわず、黒いうずまきのようになつて消えてしましました。おかげでカムイコタンには、ふたたび平和がもどつてきました。

さて、このたたかいで、山がくずれてできた土砂は、石狩川によつて運びだされ、カムイコタンの先の海を、どんどんうめてゆき、入江だつた海は平野になりました。その平野のまん中を石狩川は流れつづけ、今にながい川になつたのでした。

夏の夜空にうかぶ天の川は、このながい石狩川が空にうつつたもので、英雄シヤマイクルに切られた悪い神ニチエネカムイの首は、石になつて今もカムイコタンにのこつていると

いうことです。



### カムイコタンと石狩川

カムイコタンは今でも石狩川上流の峡谷部にあります。お話を悪い神ニチエネカムイとは話の内容から考えると洪水のことかもしれません。もしそうだとするとこの話からは、カムイコタンの人たちが川の恵みをうけながら、おそろしい洪水とたたかいつづけてきた姿がみえできます。

お話をもつたように川が運びだす土は、ながい時間をかけて積もり、平野をつくります。これを沖積平野といいます。石狩平野は石狩川が運んだ土でできた沖積平野なのです。

アイヌの言葉で「インカラ・ペツ」（まぎりの多い・かわ）とよばれた石狩川は、昔はくねくねと曲がりくねつていて、洪水が起りやすい川でした。その曲がりを直線的にむすぶ人工の川（捷水路）によって今の形になりました。石狩山地にみなもとをもち、層雲峠からカムイコタンの峡谷部をぬけ、さらにいくつもの支川をあわせて南へ流れくだり、石狩市で日本海にそそぎます。その長さ二六八キロメートル、信濃川・利根川について日本で三番目の長さをもつ大河川です。

# ミニッツのむ入り

北海道 十勝川

むかし、北海道の十勝平野が自然のままのすがたで広がっていたころ、シベ川（今の十勝川）の上流に小さなアイヌのコタン（村）がありました。そのコタンでは、狩の名人とひょうばんの高い年老いた酋長が、むすめと二人だけで、ひとつそりとくらしていました。

ところが、いまの酋長にとつては冬はつらい季節でした。

酋長は、今日も朝から狩りにでていましたが、まだ、うさぎ一びきとらえることができずにいました。

「十勝では狩りの名人といわれたこのわしが、手ぶらで帰るなんてなんともなさけないことじゃ」

足どりも重く山をおりてきた酋長は、コタンに近づくつれ「おやっ」と口をこらしました。

冬の日暮れは早く、夕やみがコタンをつつんでいましたが、チセ（家）のまえに黒い人かけを見つけたのです。

「だれじや、今ごろなんのようがあつてきたのか」

身がまえる酋長のまえに見なれぬ若者がなれなれしく近づいてきました。

「あなたが狩りの名人コタンコロクル（酋長）ですね。わたし



は有名なあなたのウタリ（仲間）になりたくてきましたのです。わたしは若いし力もある、かなならず役に立ちます、どうかここでにおいてください」

酋長は、若者があまりにも熱心にたのむので、おいてやることにしました。

若者は、おどろくほどのはたらきものでした。若者がシベ川にサクをつくれば、サクがこわれるほどのがけがかかりました。山に入ればかならずエゾシカのむれにでいました。若者は、ありあまるほどのえものを毎日持ち帰つてきました。おかげで酋長の家はすっかり豊かになりました。

そんなある日、若者は酋長に、「あなたのむすめを、妻にいただきたい」と、願いでてきました。むすめのムコにするには少し気がかりなことがありました。それは、若者が狩りにでるまえに、カムイノミ（神をおがむ）を忘れるごとでした。アイヌがカムイノミを忘れるなんて考えられないことだったのです。

それに、えものをとりすぎることも気がかりでした。アイヌは、けつして生きものをむやみにとることはしないからです。



しかし酋長は、これから先のめんどうを、見てもらえるならばと気がすすまぬままに、若者をムコにしたのです。

ところがある夜、酋長のゆめにチセコロカムイ（家の神）が

あらわれ、こう告げたのです。

「むすめのムコを、このままチセにおくなれば、このチセもコタ

ンも無事ではすまされぬ、早くおいだしてしまえ」

酋長はなやみましたがムコをおいだせずにいました。する

とまたチセコロカムイがゆめにあらわれ、同じことを告げる

のです。神のお告げにそむけないと考えた酋長はどうとう

決心をしてムコをよび

「これ以上、おまえをここにおくことはできない、出ていって

くれ」

と、告げたのでした。おどろいたムコは声をあらげて、

「出て行けどはどういうことですか」

と、つめよつきました。

「とにかく、おまえにはもう用はない。早く出て行ってくれ」

酋長も、むきになつてムコをおいだそうとしました。

酋長の決心がかたいことを知ったムコは、はげしく怒りはじめる。みると、見る見るその口はあごまでさけ目はひきつり、むらさき色のはだをした半人半獣の妖怪（ミンツチ）になつたのです。そして、えたいのしれないぶきみな声で



「なにをかくそ、われこそはミンツチの首領なのだ。おまえのむすめのうつくしさにひかれてやつてきたが、もうこれまでだ。去れというなら去つてやるが、わしがここを出で行く時は、十勝いつたいの食料の靈もさらつていく。そうすれば山のシカ、シベ川のサケはどれなくなるのだ。おまえは以前のように少ないえものをおつて、そのおどろえた体で、山や川をさまようことになるのだ」

と、すてぜりふをのこし、あれくるう吹雪とともに、かき消けすようにそのすがたは見えなくなりました。

それからというもの、あふれるほどのサケも、むれをなしていたシカも、めつたにすがたを見せなくなりました。

しかし、たとえましくても酋長とむすめは、なぜかほつとしていました。アイヌらしく、カムイとともに、おちついた日々をおくれるようになつたからです。

一方ミンツチは、日高山脈をこえ、シブチャリ川（現在の静内川）へと、すみかをかえていました。シブチャリ川では、魚の幸にめぐまれるようになりましたが、それとひきかえに、毎年のように水のさせいやが、でるようになつたといふことです。

### 十勝川とアイヌの伝説



アイヌの伝説には、川や湖の名がかなならずといつてよいほどでできます。このお話にもシベ川ができます。シベ川の「シベ」はサケのことで、アイヌの人々がつけた十勝川のよび名です。つまり十勝川は、サケの川とよばれ、サケを主食の一つにするアイヌの人々にとって、かけがえのない食料の宝庫だったのです。昔から、アイヌの人々は自然を愛し、うやまうこと忘れないのであります。そして、形あるものには、かなならず「カムイ」（神）がやどると信じていました。サケを、「カムイチップ」（神の魚）とよんでもうやま、サケをとるまえには、川の神に祈りをささげる「ペッカムイノミ」をかなならずしたそうです。

また、川はくらしの道もありました。海へなるときは丸木舟をつかいました。川にそつて歩けば山奥へ入つてもよわずにすみました。その川を「シノマンペツ」（ずっと山奥へ入っている川）とか、「リコマペツ」（高いところにのぼつていく川）とよびました。アイヌの人々にとって川は、のみ水や主食を得るところであり、海と内陸とをむすぶ交通路でもあったのです。さて、現在の十勝川は、大雪連峰の十勝岳から流れだし、音更川、札内川、利別川などの大きな支川をあつめて、太平洋にそぞく長さ二五六キロメートルの大河川で、いまもサケは元気よく川をのぼつてきます。

# カツパの神さま

青森県 岩木川



むかし、木造新田あたりの川には、カツパがたくさんすんでおつて、そのカツパに毎年なん人ものわらし（こども）が、水の中に引きずりこまれては死んでおつた。このあたりは、どの家のまわりにも小川が流れていて、わらしがいる家では心配でおちおちしておれなんだそうな。

ところで、村の弥市（やいち）の家にもかわいい男わらしが一人いた。弥市とおかみさんは、それは目に入れてもいたくないほど、かわいがつておつた。

そのわらしが五つになつた時じや。弥市とおかみさんは、しようらい、わらしがどんなにえらくなるか、村いちばんの占師（うらないし）にみてもらうことにして、二人はわくわくして、いい占いができるのをまつた。

ところが、とんでもない占がでたんじやと。

「このわらしは、カツパにねらわれている。近いうちにカツパがさらいに来るであろう」

これには二人ともびっくりどつてん、腰（こし）をぬかすほどおどろいたと。

「なつ、なんですと、そりや大変なことだ、どうすりやいいだ

ふたりは顔（かお）をまつ赤にしておこりだした。

「この辺（へん）のカツパときたら、どんなに少ない水の中（なか）からでもあらわれて、ねらつたわらしは必ずさらつていくそうじや」

弥市（やいち）の家のまわりは、水田（すいでん）にかこまれているうえに小川（おがわ）も流れている。これではカツパはどこからでもやつて来ることができる。とてもとも、ふせぐことなどできない。

こまりはてた二人は、わらしをだきかかえて、近くのお寺（じっそうじ）にかけこんだ。

「どうか、どうか、おしようさんのお力（ちから）で、カツパどもをやつつけてくだされえ、お願（ねが）いですじや」

おしようさんは目をつぶりじつと考えていたが、やがて「これは、ちょっと大変（たいへん）なことですぞ。カツパは水をあやつる力をもつておつてな、カツパをおいだすと水もおいだすことになるかもしれません。かんたんにカツパをおいだすわけには、いかんのじやよ」

「おしようさま、それではうちのわらしはカツパにとられてしまうべ」

「そんなばかなことを、うちのわらしに死ねというだべか」

ふたりは顔（かお）をまつ赤にしておこりだした。

「まあまあ、おちつきなされ弥市どん、一つだけ方法があるんじやよ。じつは水虎といふカツバの神さまをまつってお願いするんじや。水虎さんなら悪いカツバをおさえてくださるじやろ。わたしの知りあいに仏像をほる名人がいるから、いそいで水虎さまの像をほつてもらうことにしよう」

やがて、赤くぬられた水虎大明神ができあがり実相寺にまつられた。弥市の家の小川にも小さなほこらがたてられて、ここにも水虎さまがまつられた。ほこらには、おしょうさまの字で「村中安全、水害消去」と書かれてあった。

弥市とおかみさんはよろこんで、毎日ほこらへ出かけては「水虎大明神さま、どうかうちのわらしをお守りください」と、おそなえものをしておがんだ。夏には村中で水虎さまのお祭りもしたんじや。そのかいあつて、それからというものの弥市のわらしはもちろんのこと、村のわらしも、だれ一人カツパにさらわれることがなくなつたそうじや。

「水虎さまのおかげじや」

「ありがたいことじやのう、何かお礼せねばなんねえぞ」

村人たちは頭をよせあつて、お礼の手だてを相談したが、

なかなかいい考えがうかばない。

その時、弥市のおかみさんがぽつりとつぶやいた。

「水虎さまは、いつも一人ぼっちでさみしそうじや。よめっこをもらつてあげたらどうだべか」

「おう、そりやいい考え方じや」



みんなの意見がまとまって、こんどは女の水虎さまがつくられたんじや。そうして、なかよくならんだ夫婦の水虎さまがまつられることになつたんじや。

このことは近くの村でも評判になつた。

「木造新田は、水虎さまのおかげで、わらしは元気に遊んじよ

るし、大人も安心して仕事しとるだよ。おらたちの村にも水虎さまを、まつってはどうだべか」

こうして、近くの村々にも水虎大明神のほこらが、いくつもたてられ、今でも村中を守ってくれておるのじやよ。

### 岩木川とカツバの神「水虎さま」

このお話は、川や用水路での水難をおそれた村人が、水虎さまという水難防止の神さまをまつって安全を願つたお話です。水神さまは日本中どこにでもあります。水虎さまというカツバの神さまをまつっているのは、青森県でも津軽地方だけで、この地方独特の信仰だそうです。

お話の西津軽郡木造町をたずねると、小川のほとりなど、ところどころに水虎さまの小さな祠があつたり、かわいいカツバの石像がたつ〔カツバ広場〕もありました。実相寺では、赤い水虎さまがいまも大事にまつられています。

津軽地方の稲作の歴史は古く、弥生時代前期ごろの水田跡まであつたほどです。だからといって、この地はけつして豊かな土地ではありませんでした。大雨が降れば岩木川はたびたび水害を起こしました。日本海から吹きつける偏西風は、砂あらしなくなつて田畠をうめつくします。しかも、深い雪にとじこめられる長い冬、人々は北国のきびしい大自然とたたかいながら、水田をひらくため岩木川から何本もの用水路を引き、川をおそれながら大切に守り育ててきました。このような人と川との深いかわりの中から水虎さまの信仰が生まれたのです。現在の岩木川は長さ一〇二キロメートル、津軽平野を北流し十三湖にそそぎます。



# 山姥

岩手県 北上川

むかし、早池峰山のふもとに小さなお寺があつて、そこに一人のお坊さんが、ひつそりと住んでおつた。ある晩のこと、お坊さんはいろいろで餅をやいておつた。

「おお、うまそうにぶつくらと、ふくらんできたぞ」

お坊さんは手をこすりながら、やきあがつた餅に手をのばそうとしたその時じや。何者かが、ことわりもなしにずかずかと部屋にあがりこんで来たんじや。見ると、おそろしげなやまんば（山姥）じやつた。

ボサボサのかみ、しわだらけの顔、ほねばつたほほ、おどろくほど大きな口、とがつた歯をしておつた。お坊さんは、

すっかり恐ろしくなつてガタガタとふるえておつた。

やまんばは、そんなお坊さんには目もくれず、やきあがつたばかりの餅をパクパクと口にほおりこんで、またたく間に食べてしもうた。そして、礼の一言もいわずに、帰つていつたんじや。あとにはきたない足あとだけが、べたべたとついでおつた。それを見ているうちに、お坊さんは、だんだんと腹がたつてきただつて

「とんでもないやつじや。わしの餅をことわりもなしに食べおつて…しかしまあ、餅だけですんで、よかつたのかもれんて」

と、少しはほつとしたんじやな。

ところがじゃ、つぎの夜、お坊さんが餅をやいていると、やまんばがまたやつて来て、やいていた餅だけでなく、まだやいていないかたい餅までペロリと食べたあげく、そばにおいてあつた酒までぐいっと、いっさに飲みほして何もいわずに帰つていつた。

「ううむ、やまんばめ、ゆるせん ゆるせんぞえ。また来るにちがいない、今度こそこらしめてやるわい」



決心したお坊さんはつぎの日、近くを流れる北上川の川原から白い石をひろいあつめると、まるで餅のようにならべてやき、とつくりには、酒のかわりに油を入れておいたのじゃ。

思つたとおりやまんばは、その夜もまたずかずかと入つて来た。そして、やきこんだ白い石を、餅とまちがえパクパク

と飲みこむように食べ、さらに、とつくりの中の油を、酒とまちがえいつきに飲みほしたから、さあ大変。お腹の中は、やけた石で油に火がつきボウツともえあがつた。

「ううう、水水」

やまんばは、口から火を吹きながら苦しそうなうめき声をあげ

「このままじや、すまんぞえ」

と、いいのこして、すがたを消したんじや。

それから間もなくしてのことじやつた。早池峰山に大雨が降りだし、七日七夜もつづいたんじや。北上川は、とうとう大洪水を起こしてしまつた。

あはれくるう洪水は田畑も家ものみこんで流れでゆく。その時、濁流の上に仁王立ちになつた白ひげの老人のすがたが見えたそうじや。それからというもの、洪水は白ひげの老人が起こすものと考へ、洪水を「しらひげみず」とよぶようになつたんじや。ところで白ひげの老人は、実はやまんばのいかりくるうすがただと、村人たちはうわさしたそうじや。



### しらひげみず伝説と北上川

このお話は、岩手県北上川流域にのこる「しらひげみず」という伝説を再話したものです。これに似た話はいくつかあって「やまんば」が集団でやつてきたとか、やまんばが老人であつたりもします。しかしお話の筋はほとんど同じで、白ひげの老人が洪水にのつてやつてきたところは同じです。北上川は昔から、流域に多くの恵みをもたらす反面、たびたび大洪水を起こし、この地の人々を苦しめてきました。田畠ばかりでなく人々の命までうそつた大洪水からだと伝えられています。さかまく濁流が水しぶきを舞いあげながら、村々におそいかかってきた姿が目にうかぶようです。北上川は、奥羽山脈や北上山地の水を集めながら、ほどまつすぐり列島を南下して太平洋にそそぎます。その長さは二四九キロメートル、東北一長い川です。

# かいでんぶち 開殿淵

へとびこんでいった。すみきつた水のなかには、たくさんの魚がきらきらと、かがやきながらおよいいでいる。

「しめしめ、きょうはでつかいサケをつかまえるぞ」

じいさまは、はりきつて淵のふかみへともぐつていった。しかたなく、じいさまがあきらめてもどうとしたりだつた。どこからあらわれたのか、今まで見たこともない大きなサケが目のまえをすうつと、とおりすぎてゆくではないか。

「ややや、こんな大もの、にがしてはなんねえ」

じいさまは、あわててヤスを「えいつ」とばかりに大サケめがけてつきだした。ヤスはサケの尾のあたりにささつたが、おこつたサケがすごいいちからで尾をふつたので、はねとばされたじいさまは水のなかできりきりまい、気がついたときには、じまんのヤスもどこかへとばされていた。

ヤスがなくなつてはどうにもならない。じいさまはしかたなく川からあがつたが、サケをにがしたことよりも、つかい

秋田県 桧木内川



なれたらじまんのヤスがなくなつたことがなさけない。

「あのヤスだけは、なんとしてもとりもどせねばならんわい」

じいさまはなんどもなんども川にもぐつてはヤスをさがしまわつた、夕方までさがしたがまだ見つからない。

「ひょつとして大サケのやつ、しつぽにヤスがささつたまま淵のそこへにげたのかもしれない、ようし、こうなつたらどこまでもおいかけてやるぞ」

じいさまはいっぱい息をすいこむと、ふかい淵のそこをめがけてもぐつていった。淵のそこはくらくてよく見えない、それでもあきらめずもぐつて行くとあらふしげ、くろい岩かげから光がさしているではないか。

ちかずいて見ると大きな岩にあながくりぬかれていて、あの中はへやになっている、光はそこからもれていた。ふしぎにも川の水はあの中へは入らずロウソクがあかあかとともつていて、おくのほうからお経をよむこえがする。

「これはいつたいどうなつとるのじやろ」



じいさまはおそるおそるあなたのなかの中をのぞきこもうとした、  
そのとき

「たれじやあ、そこのそいているのは、  
と、でつかいこえでどなられた。

「ひょおれ わたしは門脣のものです お

「はい、さきほど、でつかいサケにだいじなヤスをとられさが  
しにきました」

「そうか、じつはな、そのでつかいサケはこのわしじや、わし  
はもと門屋の開殿寺におつた開殿坊じや。むかし桧木内川に  
大水がでて寺がながされたのをしつとるかな、そのときわし  
は寺をたてなおそと村むらをめぐりあるいたが、金があつ  
まらず寺をつくりなおせなかつたんじや。あまりにもくやし  
くて、わしはサケにすがたをかえてこの川の主になつた、そ  
れいらいわしは金ものが大きらいなんじや」

からはヤスなど金かなものをけつして川にいれないとちかいます  
る】

じいさまがなんともあたまをさげてあやまつていると  
なのおくからこわい目めをした大坊主おおぼうずが、じいさまのヤスをも  
つてあらわれた。

このことがあってからというもの、じいさまだけじゃなく  
村人むらびとたちもけつして金かなものをもつて淵ふちに近づかなくなつた。  
そしてだれいうともなくこの淵ふちは開殿淵かいでんぶちとよばれるようにな  
つたという。

# つんぶく達磨だるま

山形県  
最上川



むかし。

ツンブク ツンブク

たつた一人で最上川を流れていた、だるまさんのおはなし。  
蔵王温泉から、しぶくて赤い水が、ぼこぼこ流れてくる川  
が、ほら、須川だがな。

須川の水は、のみ水にならないばかりか、田んぼにかける  
と、イネがちよりちよりにかれてしまふし、さかな一匹、  
むしけら一匹、生きておれないこまつた川よ。

その川のほとりに、「おだるまのサクラ」とよばれる大きな  
サクラの木があつたど。このそばに、お寺があつてな、お庭  
の小さなお堂に、木のだるまが、まつられてあつたけど。

あつい夏がくるとな、はだかのわらしどもがやつてきて、  
おしようさんをみつけると大声でたのんだど。

「おっさま、おっさま、だるまさん、かしてけろ」

人のいい、おしようさんのへんじを、まちかねたように、  
わらしどもはお堂から、だるまさんをかつぎだし、

なかつたどは。

ツンブク ツンブク

いつのまにか須川は、広い最上川に流れでていたど。

だるまは、最上川の流れにのつて、ながい川の旅をしたど。  
谷間をぬけ、盆地をとおり、また谷間をぬけ、またまた大き

な盆地をぬけ、さいごは、最上峡をぬけ、広いひろい庄内の  
平野にでたど。

ツンブク ツンブク

だるまは、三日三晩も流れ流れて、とうとう酒田へたどりつ  
いたど。もう目のまえには、海が見えていたつげが、ちよう

ど、そこに通りかかったのは、近くの村の名主どん。  
「ありやあ、だるまさんだ、もつたいねえごと」

名主どんは、だるまをひろいあげて、もつてかえると、て

いねいに床の間にまつって、まいにち、おがんでいたつげが、  
名主どんの家では、だれひとり、はらいたひとつ、おこさな  
いようになつたど。

ツンブク ツンブク

ういたり、しずんだりしていったつけが、やがて、須川のま  
んなかを流れはじめたど。

「わっしょい、わっしょい」  
と、川つぶちまで、はこんでいつたど。

ドップブラン ジャブラン ジャブラン

なげられた、だるまをおいかけて、わらしども、飛びこん  
だ。須川の水はしぶいから、目をあけると、ぴりぴりした  
ども、わらしどもには、川ほどいいあそび場は、ほかには、  
なかつたどは。

わらしどもは、一日じゅう、だるまとあそんだど。  
だるまも、一日じゅう、わらしどもとあそんだど。  
夕方になつて、お日さまが西の山にしづみ、川のおもてが、  
さあつとくらくなると、この日にかぎり、わらしどもは、だ  
るまのことなど、すっかりわすれて、かえつてしまつたどは。  
のこされただるまは、月夜のきしへでひとりぼっち。

ツンブク ツンブク  
ところが、ある晩のことよ。だるまが、名主どんのゆめに  
でてきて、たのむんだつけど。

「名主どん、わしをもとの村につれていってくれ。最上川をさかのぼつてゆくと、須川が流れこんでいる、その須川を少し

さかのぼると、大きなサクラの木があつてな、そこがわしの村じや。いま、村では、はやりやまいがでて、こまつておるのじや。はやく、わしをつれていいてくれ」

はつと日がさめた名主どん

「はてさて、ふしぎなことじや」

と、目をこすつたど。名主どんは、つぎの晩も、おなじゆめを見たど。

「だるまさま、それほどおつしやるならば、もとの村へおつれます、それでもだるまさま、もしわしらの村に、はやりやまいがでたときは、もどつてきてくださいますか」

だるまは、こつくりうなずいたど。

よろこんだ名主どんは、さつそく、旅じたくをして、だるまをせおうと、なん日も、なん日もあるいて、もとの村をたずねたど。最上川をさかのぼり、須川をさかのぼつて、やつとのことで、サクラの花がパアツとさいている村にたどりついた名主どんは、もどどおり、お寺のお堂に、だるまをおさの村を、たすけたど。

「あれあれ、だるまさまが、また、酒田へおでかけだ」

といつて、酒田のはやりやまいが早くおさまるようにと、だるまさまを見おくつておつたど。こうして、だるまは、ツンブクツンブクと最上川を、くだつたりのぼつたりして、二つ

### だるまが通つた川の道



めたど。

村人たちは、「ありがたいごど」と、こぞつておまいりにきたっけが、ありや、ありや、ふしぎ。だるまさまをおがんだら、だれもかれも、はやりやまいなど、けろりとなおつてしまつたどは。

そのうちに村人たちは、はやりやまいのことなど、すつかりわすれてしまつたど。そんなある日、おしようさんのゆめのなかで、だるまがたのむんだつけど。

「どうも酒田に、はやりやまいがでたらしい、ちょっととなおしてくるから、わしを川に流してくれ」それをきいた村人たちは、さつそく、だるまを須川にはこんでいって流したど。

ツンブ ツンブ ツンブク ツンブク

だるまは、また三日三晩かけて酒田へと流れていつたど。だるまを、まちかねていた酒田の人たちは、おおよろこびしたど。

それからというもの、最上川で、だるまを見かけると、村人たちは

「ツンブ ツンブ ツンブク ツンブク」

だるまが通つた川の道

最上川

日本海

庄内平野

ダルマ寺 須川

長井市

山形市 咸王山

最上川 酒田

山形県中山町の達磨寺に伝わるこの民話は、最上川なくしては語れない、心あたたまるお話をです。

昔、中山から酒田まで行くには、けわしい山道をこえ、川ぞいの荒れ地を通り、よその領主がおさめる土地を通してもらわなければ行きつけない、きびしい道のりでした。交流もなく遠くはなれてくらしていた人たちが、だるまさんと川によつて幸運を分かちあい、心をかよわせあつたという、なんとほほえましい、すてきなお話を。

さて、最上川は長さ二二九キロメートルの大きな川です。支川とともに県外に一步もでることなく、山形の平野をうるおしています。昔から最上川は山形の産業をささえる川の道もありました。内陸部でとれたお米や、高価な染料になつた紅花、着物につかわれる織維アオソなどが川舟で最上川をくだり、酒田で海路につみかえられて京の都や江戸へ向けて運ばれていきました。今では、想像もつかないほどの多くの舟が、のぼりくだりした川の道でした。

最上川の支川、達磨寺ぞいの須川にたちよつてみると、川底の石は酸性の水で赤さび色になつていました。この須川のしょっぱい水も、最上川に合流するとうすめられ、かきけされてしまします。それほど最上川は水量ゆたかな川で、だるまさんがツンブクツンブクと旅をするのには、ぴつたりの川だったのです。

33

# かとくさぎの合戦

かつせん

宮城県

江合川

・鳴瀬川

むかし、江合川と鳴瀬川とが、お倉場というところで、くつついていたころのお話です。

ある夏の夜のことです。お倉場に一軒だけ、小さなあかりがともる小屋がありました。その中で川漁師のおじいさんが、あみのやぶれをなおしていました。すると川のほうで、ざざつと波の音がして、ぶるぶるつと水をきる音が聞こえました。

「はて、この夜ふけになんじやろ」

ふしぎにおもつたおじいさんが戸を開けて見ると、大蛇のようによがくて、ぬるぬるしたものが、こちらにやってきます。びっくりして戸をしめようとしましたが、まにあいませんでした。長いからだが、ぬるっと、小屋の中に入つて來たのです。おどろいているおじいさんに

「どうか、おどろかないでください。わたしは江合川の主のうなぎです。お願ひがあつてまいりました」

そういつて、ていねいにおじぎをして話をつづけました。

「じつは、あすの夜、このまえの川で、鳴瀬川の主のかめと

合戦することになったのです」

「えつ、あのらんぼうものの大がめと合戦する、それはまだどうして」

「はい、ちかごろ江合川の水が、鳴瀬川にどんどんとられてしまい、江合川はすっかり浅くなつてしましました。しかたなく、わたしは鳴瀬川でくらしているのです」

「それで大がめが、出ていけというのだな」

「江合川の水をとつておいて、出ていけとはあんまりです。わ



たしも川の主です。おめおめと、ひきさがることなどできません。このうえは、たたかうしかありません。どうかおじいさん、みかたになつてください」

「しかし、このわたしにどうしろというのかね」

「わたしが、いくら力じまんの大うなぎでも、岩のようにかたいコウラをもつた大がめには勝てそうにありません。もしわたし

が弱気になつてひるんだ時、大声ではげましてほしいのです。あすの夜、丑の刻（夜中の二時ごろ）です。どうかお願ひします」

そういうおわると大うなぎは、ずるつと、あとずさりして、くらやみの中へ消えていました。

つぎの夜、おじいさんは水神さまのお守りを、おでこにしぱりつけ、どきどきしながら川のようすを、うかがつていました。ちょうど丑の刻（夜中の二時ごろ）になつたころです。きゅうに、川の水がもりあがつたかとおもうと、いきなり、天までとどくような水しぶきがまいあがり、大がめと大うなぎの、すさまじい、たたかいがはじまりました。

はげしく水をうつ音は地ひびきをたて、あたりは水しぶきで見えないほどです。くんづほぐれつ、たたかううちに、さすがの大うなぎも力つきてきました。大がめは、ここぞとばかりに大うなぎの頭めがけて、ふとい前足をふりおろそうとしました。その時です。おじいさんは、われを忘れて

「やめろ、やめろつ、やめんと水神さまのはつがくだるぞ」そうさけびながら頭にしばりつけていた水神さまのお守りをたたいて見せました。大がめはおどろいて、ふりあげた前足をひっこめると、あわてて水の中へにげていきました。あやういところをたすけられた大うなぎは、おじいさんに、これからは江合川の主らしく、江合川でくらすことをやくそくして、なんどもお礼をいいながら川へもどつていきました。

その後、なにごともなく、やがて秋が近づいたころでした。台風がやつてきたのです。はげしい雨がたたきつけるように降りだし、大あらしになりました。その中を、どこからあらわれたのか、白い着物をきたお坊さんが、すずをふりながら大水になることを知らせてまわっています。

おどろいた村人たちは、あわてて高台へにげました。まもなくして、ごごうつと、おそろしい音をひびかせ津波のような大水がおしよせてきました。お坊さんのことばを信じなかつた人は、あつというまに流されてしまいました。そのすぐかつたこと、大水とともに流れてきた土砂は、江合川と鳴瀬川とが、つながつていたところをうめつくし、べつべつの二つの川に分けてしまったほどでした。しかしそのおかげで、その後、大うなぎがすむ江合川の水は、鳴瀬川にとられることもなくなり、たっぷりと水が流れるようになりました。ところで、大水を知らせてくれたお坊さんは、いつたい、なものだつたのでしょうか。じつは江合川の主の大うなぎだつたのですが、お倉場の川漁師のおじいさんだけは気がついていました。

このお話では、乱暴者は鳴瀬川のカメになつていますが他のいい伝えでは、乱暴者は江合川のウナギになつています。江合川のウナギが鳴瀬川に乱入してきて、自分の川にしようとする、そこで年老いたカメはお漁師さまに助けをもとめるといふ筋書きです。いずれにしてもこの話は、江合川と鳴瀬川の二つの川が合流地点でぶつかり氾濫を起こす洪水のすさまじさを語ったものではないでしょうか。

この二つの川は、奥羽山脈から、並ぶようにして平野を流れていますが、現在は、古川市のはずれで、新江合川という人工の水路でますばれています。ところが新江合川には堤防があるので水が流れていません。川底まで草原になつていて対岸どうしをむすぶ通路まであります。つまりこの川は、洪水の時だけ活躍する放水路で、江合川本川との境は越流堤（洪水が、一定量を超えた時だけ流れこめる仕組の堤防）で仕切られています。今もこの地域は洪水の氾濫が起こりやすいところです。昔は洪水のたび、江合川の流れがかわって、鳴瀬川とついたりはなれたりしていたと考えられています。古川という地名も古くは川であったというところからきているということです。そのような地域の特徴をみると、カメとウナギの合戦の背景がみえてきておもしろいですね。



「ありがとう、ありがとうございます。それにおまえも、安心して、くらせるようになつてよかつたなあ」  
おじいさんは漁にでるたびに、江合川にむかつて語りかけたということです。



# 河五郎渡士

栃木県 荒井川

むかしむかし 栃木県の久我あたりは、山と山にはさまれた深い山里で、そこを流れる荒井川にそつて道が一本あつた。人がひとりやつと通れるくらいの山道だったが、村人たちにとつては、どこへ行くにもこの道がたよりじやつた。

だが一つこまつたことがあつた。じつは

荒井川が、ときどきあばれ川になることじやつた。大雨が降つたりするとさあ大変、山おくからまるで滝のような水がどつと流れきて、丸木橋はもちろん川ぞいの道までくずしてしまう。これには、ほとほと村人たちはこまつておつた。

さて、この荒井川のほとりに河五郎じいさんは、たつた一人で住んでおつた。としはとつていても足こしはがんじょうで、くまのようにたくましい体をしておつたが、心はいたつてやさしく、だれにも親切じやつた。川べりのぬれた道をはうようにして通る村人を見ると、だまつてはいられない。

「これ、そこはすべりやすい、わしにつかまれや」と、手をひいてやつたり、こわれた橋の前でこまつてい

る人があれば

「あんたにや、この流れを渡るのは、むづかしそうじや」と、肩にかついで渡してやつたりして、村人たちから、感謝されておつた。

ある年の夏のこと、河五郎が山仕事を終え帰りじたくをしていると、にわかにゴロゴロ、バリバリツと、かみなりがなりひびき、たたきつけるようななはげしい雨が降りだした。

「こりやあ大変じや、荒井川があばれだせば向こう岸の家に帰れなくなつちまうぞ」

河五郎は、ずぶぬれになりながら山をおり、やつとのことで川岸までたどりついたが、もうその時はおそかつた。丸太の橋はすでに流されていて、荒井川の流れはキバをむいた龍のようにあれくるい、今にも向こう岸の



河五郎の家までも、のみこみそうないきおいじやつた。

これではさすがの河五郎もどうすることもできない。

「神さま、なにとぞ荒井川を、しづめてくださいませ、一生

のお願いですだ」

と、村の加蘇山神社に向かつて祈りつけたんじや。するとどうだらう、河五郎の必死の祈りがとどいたのか、まもなく、はげしい雨はうそのようにピタリとやみ、あくるつていた川の流れは、みるみる引きはじめ、いつものおだやかな流れに、もどつたんじや。

「ややや、神さまがわしの願いをかなえてくだされたぞ、なんとまあ、ありがたいこと」

河五郎は大よろこびしたが、ふと考えた。

「たしか、わしは一生のお願いですと祈つたはずじや。これからは大雨が降つても、また一生のお願いというわけにはいかねえぞ。なんども同じ願いをしては神さまに、

もうしわけないからのう」

そこで河五郎は神さまへのお札の心もこめて、大雨が降つても流されない、がんじょうな橋をつくる決心をしたんじや。

あくる日から、河五郎の橋づくりがはじまつた。山から太い木をきりだしては、がんじょうな橋ぐいをつくり、何本も何本も川にうちこんだ。いくら元気な河五郎じいさんとはいえ、これは大変な仕事じや。太い指はまめだらけ、そのまめがつぶれていつも血がにじんでおつた。丸太をかつぐ肩からも血がしたたる。それでもめげず、くる日もくる日も、はたらきつづけ、とうとう、がんじょうな橋をつくりあげたんじや。おまけに、まわりの道までなおしてしまつた。

おかげで、雨の日も村人たちは安心して、川ぞいの道を行き来できるようになつたんじや。

「河五郎じいさんや、ありがとう、ありがとう」

村人たちは、橋をわたるたび、野菜をとどけたり、も

ちをとどけたりして感謝した。そのうち、だれいうともなく、このあたりを河五郎渡土（河五郎がわたしてくれたところ）と、よぶよくなつたんじや。



短くて急流という日本の川の特徴や、洪水とたたかいながらも川によりそい、たがいに助けあつてきた人々のすがたが読みとれるお話をです。

荒井川は前日光の山地を背に、上久我の上流にある大滝を源流として流れくだる約一八キロメートルの小さな川ですが、その流れは大芦川・渡良瀬川と合流をかさね、やがて利根川にそそぎます。

最近は川の整備も進み、大きな被害はでていませんが、過去いくたびか大きな災害を起こしています。川ぞいの道を行くと、ところどころで大雨のときは、土石流に十分注意するようによびかけた、かんばんにであります。

むかし、榛名山に、天狗がすんでいたころのお話です。  
榛名山のすそこには総社藩があり、秋元長朝という心のあたかい殿さまがおりました。ある日、けらいをあつめた殿さまは、とんでもない計画を話しはじめました。



「この総社の地は、あれ地ばかりじや。村のものたちは米のめしさえ、ろくに食えずにはいる。わしはこの地にたっぷりと水を引き、水田をふやしたいと思うが、どうじや」  
「しかし殿、たっぷり引けるような水はどこにもありますぬ」「ならば見せてやろう、ついて来るがよい」  
やつて来たところは総社の村はずれ、高い崖の上でした。崖の下は広くひらけ、そこには大きな利根川が青くかがやいて流れています。  
「どうじや、みごとな流れじや」  
それを聞いて、けらいたちはあきれてしましました。たしかに水はたっぷり流れているけれど、あんなにも低いところから水を引くなんて、殿さまの頭はどうかしていると思いました。  
「みんなのものよく聞け。崖の下から引けとはいわない。川の



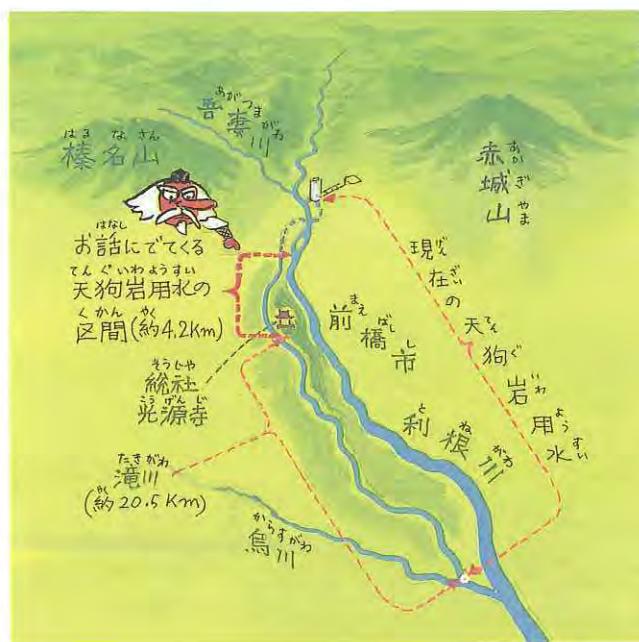
「上流からこの地まで水路をほりつなげば水は引けるはずじゃ」  
これは大変むづかしい工事です。しかし殿さまの決心はかたく、けらいたちは計画をねりはじめました。そのうわさは村々に伝わっていきました。  
「用水工事を手伝えば、年貢はおさめなくてよいらしい」  
「しかし、となりの国の殿さまには、雲にはしごをかけるような話だと笑われたらしいぞ」  
「それはくやしいじやないか、意地でも用水路をほつてやるぞ」  
「ふふふん、用水路をほるなんて、かんたんではないぞえ人間どもになにができる、すぐあきらめるにきまつとるわい」  
ところが、くる日も、くる日も、村人たちがあせまみれになつてはたらいています。夏がすぎ、秋がすぎ、冷たい雪がふつても人々は休みません。やがて二年がたちました。  
「しつこい人間どもめ」  
ひまな天狗はいらいらしていましたが、とつぜん目をかがやかせると  
「ややや、おもしろくなつてきそうじや」  
と、身をのり出したのです。人々が用水路工事の先にあつまつて、おおさわぎをしていましたからです。  
「岩だ、でつかい岩にぶつかってしもうた」  
みんなは、必死で岩をほりだそうとしますが大きな岩はびくともしません。さすがに人々も、とうとう、よわねをはきはじめました。



「ああ、もうおしまいだ、今までの苦労がだいなしだ」  
その時です。竜巻のようないわねをはいたな。おまえら人間の力も  
ものがいます。見るとあのひまな天狗でした。  
「ウハハハ、とうとう、よわねをはいたな。おまえら人間の力も  
そこまでじゃ。用水路はあきらめるのじやな、ウアツハハハ」  
その言葉にムツときた一人の若者がいました。  
「はい、あきらめるしかないですわい。こんな大岩どかすなん  
て天狗さまでもむりですわい」  
それを聞いて天狗はあわてました。  
「な、なんだと、この天狗さまを、なめるでないぞえ、わしの  
力を見せてやるからおどろくな」  
そういうが早いか、天狗は大岩をけつて飛びあがり、大岩  
めがけて「カアツ」と、気高いを入れました。バキン、バリ  
バリ、かみなりがおちたような、すさまじい光と音がして、  
みんなは地面にたたきつけられました。  
しばらくして顔をあげると、どうでしょう。大岩はあとかたも  
なくくだかれ、飛びちっているではありませんか。

「わあい、やつたあ。すげえ、すげえ、さすが天狗さまじゃ」  
村人たちは、歓声をあげて、あたりを見まわしたが、もう

天狗のすがたは、どこにも見あたりませんでした。  
その後、どんどん工事がはかどり、三年目には用水路が  
完成しました。総社の村々には、利根川の水がたっぷりと運  
ばれ、あれ地はつぎつぎと水田に変りお米がたくさんとれる  
ようになりました。それからとくいうもの、村人たちはこの  
用水路を天狗岩用水とよび、お殿さまには感謝する言葉をき  
ざんだ碑をたてました。



難工事をたすけた天狗と利根川

お話を天狗さま、どうやら本当にいたらしいのです。といつても、鼻が長  
くて魔力をもつた天狗ではありません。  
調べてみると、用水路工事の途中、大岩がでてきてこまつていると、そこ  
に一人の山伏があらわれ、村人を指図して岩をどかせたらしいのです。その  
見事な指挥ぶりに感心した人々が、あれは天狗さまにちがいないと語りあつ  
たのが、天狗岩用水の名の出来になっています。今から約四〇〇年も昔、  
徳川家康が江戸に幕府をひらいたころのお話です。

当初の天狗岩用水は四・二キロメートルほどの小規模なものでしたが完成  
の翌年から五年をかけ、さらに下流へ、二〇キロメートルあまりも延長工事  
を江原現左衛門という人が、幕府の力もかりておこないました。この区間は  
その後、一級河川、滻川に指定されましたが、この区間と上流へ延長された  
区間も含めた三〇キロメートルが、現在、天狗岩用水とよばれています。こ  
の地の水田は、今でも天狗岩用水の水にたよっているのです。

この天狗岩用水に水をおくり続いている利根川は、群馬、埼玉、栃木、  
茨城、千葉の各県と東京をうるおし、太平洋に流れ出ます。日本の一  
流域面積をもち、日本で一番目の長さ三二二キロメートルを誇る大河川です。

# 琵比 琶 滾

とうきょうと  
案内川



むかし、高尾の山で修行していた俊源というお坊さんが、さらに、よい修行の場をさがして、山深い森へ分け入った時のことです。どこからともなく、しづかに琵琶を奏てる音がひびいてきます。

「さて、ふしぎなことよ。けものしかすまぬこの山おくで、

琵琶をひく人がいるとは、どうしたことじや」

お坊さんは、そら耳かと自分の耳をうたがいました。しかし、たしかに琵琶の音は聞こえできます。あたりを見まわしても木や草がおいしげる山の中です。人のけはいすらありません。しかし、ベベン、ベベンとひびく琵琶の音はやむことがありません。

「いつたいどこから、ひびいてくるのじやろ。それにしても、なんともいえぬ、よい音色じやな」

お坊さんは、その音が、どこから聞こえてくるのか、つきとめとなりました。ところが、どつちの方から聞こえてく

るのか、はつきりしません。前の方からでもあり、右の方からのようでもあり、左の方から聞こえるようにも思えます。

お坊さんは、やぶを、かきわけ、かきわけ、あちらこちらと森の中をさまよいました。そのうち森は、ますます深くなり、おまけに霧がでてきてあたりいつたいが、ほとんど見えなくなつてきました。

「やれやれ、こまつたことになつてしまふた。自分が、どこにいるのかも、わからんわい」

お坊さんがとほうにくれていると、とつぜん目の前のうすぐらい霧の中から、すうつと何かがあらわれました。よく見ると、それは、りっぱなすがたをした一匹の鹿でした。

鹿はお坊さんに、こちらに来なさいと、さそうようなそぶりをするのです。

「そうか、道案内をしてくれるのじやな」

そういうて、お坊さんは鹿について行くことにしました。

鹿は深いしげみをさけて小さな沢に出ました。沢には、すきとおつた冷たい水が流れています。その沢すじを鹿はどんどんさかのぼっていきます。お坊さんは鹿を見うしなつてはならぬと息をはずませながらついて行きました。

やがて、どうくつのある大きな岩の前に出ました。すると鹿はここで、かき消すように見えなくなつてしましました。

ここまで、むちゅうで登つてきたお坊さんは、琵琶の音色のことなど、すっかり忘れていました。ところが、ふと気がつくと、頭の上で琵琶の音がはつきりと聞こえるではありませんか。はつとして目をあげると、まつ白な着物をきた白ひげの老人が大岩の上で琵琶を奏でています。身がひきしめるほどおごそかな音色にお坊さんは、身も心もあらわれるおもいがしました。

お坊さんは、その場に両手をつくと

「どうか、わたくしに悟りの道をお教えください」

しばらくして、おそるおそる頭をあげて見ると、どこからともなく大岩のまわりに鹿があつまつてきました。と、まもなく、鹿も白ひげの老人も大岩にすいこまれるように消えてしました。

そしてまわりをとりまいていた霧がすうつと晴れると、そこには琵琶のかたちをした滝つぼがあらわれ、清くすんだ水がしぶきをたてて流れ落ちていました。その音色は、白ひげの老人が奏でていた琵琶の音色と同じで、お坊さんの心の底まで清めてくれているようでした。

「ありがたいことじや」

よろこんだお坊さんは、ここを、悟りをひらく修行の靈場としたのでした。

## 小さな谷川と信仰

お話を中のお坊さんは、俊源大徳という実在したえらいお坊さんです。鹿に案内されてさかのぼったことからこの川は、案内川とよばれているのです。小さな川ですが浅川と合流しさらに多摩川にそそぐ一級河川です。多摩川といえばアザラシのタマちゃんで全国的に有名になつたので、思いたる方も多いと思います。多摩川は東京都民の飲み水をまかなう重要な川です。案内川はその多摩川の水源の一つというだけでなく、古くから関東三霊山として有名な高尾山より発する信仰の川でもあります。

昔から日本の人々は山には神が宿っていて、その神は川を通つて里に恵みをもたらすと信じていたのです。その清い水を求めて今でも琵琶滝には多くの人々が訪れます。滝に打たれて心身を清める修行の場となつてゐるのです。





# おうせ 王瀬の長者

おうせ

ちょうじや

新潟県

信濃川

むかし、沼垂の王瀬（今の新潟市）と、いわれたあたりに、たいそう金持ちの長者が住んでおつた。

そこは、信濃川が海にそそぐあたりで、川には、なんでも広がっておつて、どれもぜんぶ長者のものだつた。そこらの百姓や漁師もみんな長者につかわれておつたと。

秋がきて、信濃川をサケがのぼりはじめると、長者は漁師たちにサケをとらせる。日に百ひきもの立派なサケがとれたそうな。それを遠くまで運ばせて高い値でうらせた。長者はもうけるばかり、毎日がほくほく顔だつたと。

ところが、一年に一度だけ長者のきげんが悪くなる日があつた。それは十一月十五日でサケのたいぐんが川にやつて来る日であるが、しかしこの日にかぎつて漁師たちはこぞつて仕事を休んでしまつからだつた。

漁師たちが休むのにはわけがあつた。それは、大介、小介と名のるサケの夫婦が、たいぐんをしたがえて



「大介、小介、いまのぼるうつ」

と、さけびながら信濃川をさかのぼり、信州の戸隠山へ、おまいりに行く日だと伝えられておつたからだ。大介、小介は三メートルあまりもある大きなサケで、銀色のうろこをきらめかして泳ぐがたは、それはそれは見事なものだつたそうな。漁師たちは、そのありさまを敬つて、この日ばかりはけつして川へ網をうつことはしなかつたのだと。

長者には、これがなつとくできない。

「毎年、毎年、がまんしてきたが、もう、がまんできん

長者はある日とつぜん漁師たちをあつめてこういったと。

「今年の十一月十五日ばかりは、仕事を休んではなんね。なんとしても、あの大介、小介をつかまるのじや」

漁師たちはおつたまげた。

「そげんことすりや、ばちがあたる。そればかりは、ゆるしてくらつしゃれ」

みんなは、口ぐちにたのんだども長者は

「わしのいうこと、きかれんやつは、この土地にはおかんすけ、どこへでもいげや」と、どなりつけたんだと。

その夜のこと、すっかりねこんだ長者の耳もとで

「長者どの、長者どの」

と、よぶ声がしたんだと。はつとして起きあがった長者のまくらもとに二ひきの大好きなサケがならんでおつて

「わたしたちをつかまえるなんて、お願ひだから、やめてくだされ」

と、たのんだと。朝がたまでに三度もたのみに来たども、長者はその願いをはねつけたそな。そして、とうとう十一月十五日がやつてきた。長者は朝からはりきつて

「サケの大介、小介がなんぞい、たかがサケじや、こわがることはなんもない、さあ、はよう網うてい」

と命令した。長者にさからえない漁師たちは、しかたなく網をうちはじめた。ところが、なんど網うつても一びきのサケもかからない。

「もつとしつかり網をうてい、しつかりうてい」

長者は声をからして、わめきちらすが、どうしたわけか小魚一ぴきかからなかつたと。漁師たちはくたくたになつて「なんば網うつてもだめでがんす、たたりがおこらんうちに家に帰らしてけろ」

と、にげるよう帰つてしまつたそな。

いつのまにか日はしづみ、あたりはすっかり暗くなつておつた。しかたなく長者も家に帰つたが、くやしくてねむれないと。ま夜中まで一人で酒をがぶがぶのんで、たおれるようにねどこに入つたと。それから、どれくらいたつたか、ぞくぞくする寒さで長者が目を開けると、まくらもとに、かがやくような銀色のかみをなびかせた、じいさまと、ばあさまが、こわい日をしてにらんでおつたと。

「な、なんぞい、お、おめえたちは」

長者がふるえる声でそういうと「今日は、なんとも、ごくろうじやつたのう、わたしたちのたのみもきかず網をうつとはなさけない」

と、いいのこすと二人のすがたは、すうつと消えてしまつたそな。そして、しばらくすると川のほうでバシャッと水に



飛びこむ音が聞こえてきたと。

「ああつ、あれは大介、小介」

と、おもつたが長者は声をだそうにも、なぜか声がせず、しだいに気がとおくなつて、くらやみに、すいこまれていくようだつたと。と、その時だつた。

「大介 小介、いま、のぼるうつ」

と、さけぶ声が信濃川にひびきわたり、川面がふくれあがるほどの

サケが、月の光にかがやきながら、ぞくぞくと、川をのぼつていつたそな。

それからというもの、長者の家では不幸がつづき、稻はみのらず魚もとれない、長者もとうとう病気になつて、くるしみつづけて死んだそな。



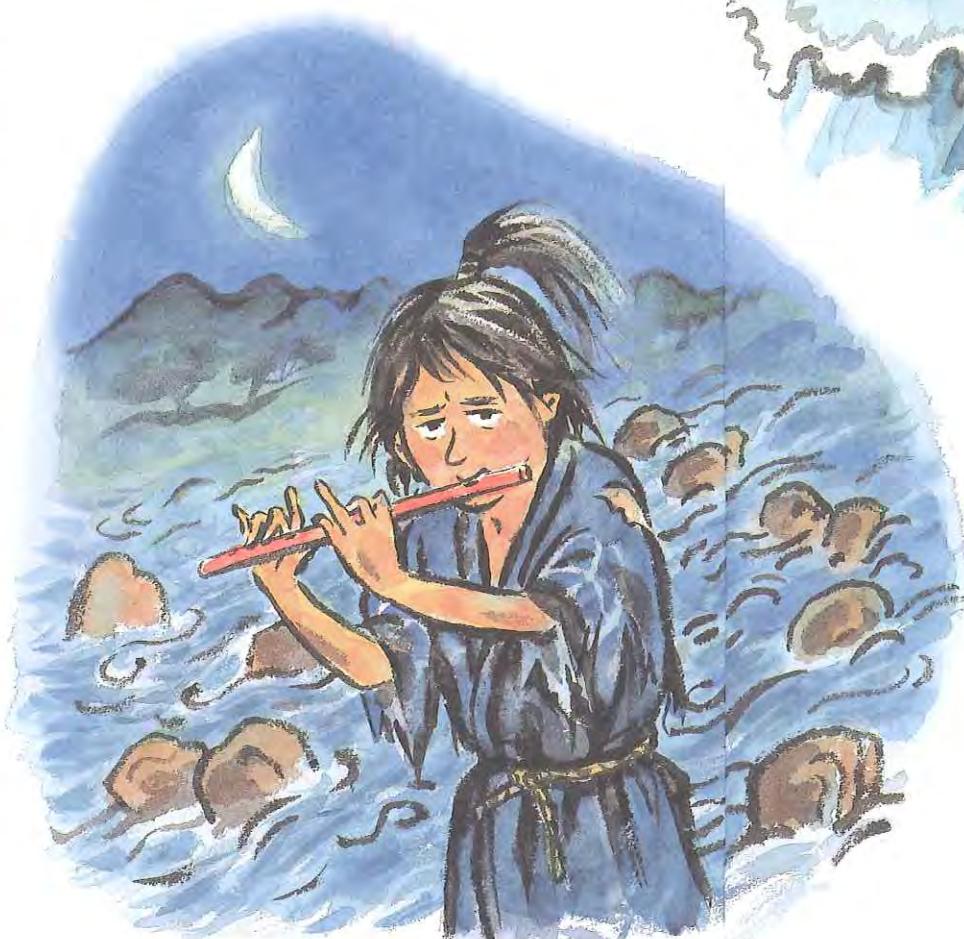
さて、お話をでてくる信濃川は、長さ三六七キロメートルの日本一長い川です。水の豊富さでも日本の川では横綱格です。この川の水は、北アルプスや八ヶ岳、さらに秩父山地や越後の山々など、冬には雪につつまれる高い山々から流れだしています。山々につもつた雪は暖かくなつてとけだすまで、大地にしつかりとどまっています。信濃川の水が豊富な理由はここにあるのです。

しかし、大量の雪がいつきにとけだすと洪水を起こすことがあります。それを融雪洪水といいます。長い年月の間に大雨や融雪洪水によつて運ばれてきた土砂が、積もり積もつて新潟平野ができました。また、この大介、小介の伝説は山形県にもあつて、同じく十一月十五日にはサケ漁を休むといい伝えがあるそなです。

# 笛吹川の悲しい音色

山梨県 笛吹川

むかしむかし、芹沢の里とよばれる山おくの村に、ごんざぶろうという若者がお母さんと一緒に住んでいました。ごんざぶろうのお父さんは身分の高い人でしたが、たたかいにやぶれ甲斐の国へのがれたといううわさがありました。このお父さんをさがし歩いて、ごんざぶろるとお母さんは、この地にたどりつき、かりずまいをしていました。二人が住む小さな家は谷間の川ぞいにありました。二人はこの川にそつて、お父さんをさがそうとしていたのです。



けれども、お父さんはなかなか見つかりません。むなしく年月がすぎていきます。お母さんは、もうすっかり、つかれているようでした。しかしお母さんは一つだけ心のなぐさめがありました。それは、ごんざぶろうがふく笛の音でした。山の鳥でさえ聞きほれるほど、それはそれは見事なものでした。お母さんは、ごんざぶろうの笛を聞くのをなにより楽しみにしていました。ごんざぶろうも、お母さんのために心をこめて笛をふきました。それにお母さんをたすけて、よくはたらきました。村人たちは、ごんざぶろうの、そんなすぐたを見て、親孝行の見本だとほめたたえておりました。

ある年のことでした。秋も終わりだというのに台風がつぎつぎとやって来て、毎日のようにはげしい雨が降りつづきました。ごんざぶろう親子は、もう何日も家にとじこもつたままでした。家のそばを流れる川からは、ぶぎみな水音がごうごうとひびいてきます。

「お母さん、ちよつと川のようすを見てきます」

不安になつて外に出たごんざぶろうは、自分の目をうたがいました。降りしきる雨の中、あれくるつて流れる川は今ま

で見たこともないおそろしいすがたをしていました。ふだんは見とれてしまうほどのうつくしい川が、まるで、きばをむいた龍のように見えるではありませんか。

「お母さん、ここにいてはあぶない。高いところへうつりましょう」

「高いところといつてもこの雨の中、どこへ行けばよいのでし  
二人が話しあつてゐるその時でした。

ドドドドッと、すさまじい音がして、滝のような水がおしよせてきたのです。あつという間に家はこなごなにつぶされ、一人はあれくるう川に、のみこまれてしましました。

### 「おかあさん おかあさん」

さかまく波に流されながらさけびつづけましたが、お母さんのすがたは、もう、どこにもありませんでした。

雨がやみ、昨日のあらしがうそのように、秋晴れの空が広がりました。しかし川原には大きな石がごろごろしていて、にごった水がざわざわとはげしく流れています。その川原を川下にむかってお母さんをさがしまわるごんざぶろうのすがたが、いつまでも見えていました。

それから、何日も何日もすぎました。それでも川原に行くと、かならず、ごんざぶろうのすがたがありました。ごんざぶろうは夜になつてあたりが見えなくなると笛をふきました。

「今夜も、ごんざぶろうが笛をふいている。あわれじやのう」

ごんざぶろうの笛の音は、いつも人々のなみだをさそつておりました。いつしか、りりしかつたごんざぶろうも、頭の毛はぼさぼさ、着物はぼろぼろ、手も足もきずだらけ、すつられていきました。

あわれんだ村人たちは、ごんざぶろうのなきがらを、長慶寺に手あつくほうむつてやりました。



### 「もう、ごんざぶろうの笛を聞くことはできんのう」と、人々はさびしく話しあつていました。

ところが、それからしばらくして、夜になると川の流れの中から笛の音がかすかに聞こえてくるようになりました。それは、悲しいほどうつくしい笛の音でした。それからというもの、だれいうとなくこの川を、笛吹川とよぶようになつたということです。

### あばれ川が生んだ、かなしいお話

ふだんはおだやかに流れている川も、ひとたび洪水を起こし、あばれ川になると、どんなにおそろしいかが、このお話をからわかると思います。ごんざぶろう親子が住んでいた芹沢の里は、笛吹川上流の深い山々につつまれたV字形の谷間にあります。このような渓谷の川は、大雨が降れば、たちまち水かさがふえ、滝のようなはげしい流れになります。大昔から、笛吹川は、たびたび洪水を起こし、多くの土砂とともに甲府盆地に流れこんでは水害を起こしていました。川が山からぬけだしたあたり、山梨市の差出の磯あたりはとくに洪水被害が多いところでした。

ここには、武田信玄がきずいたといわれる万力林とよばれるりつばな水害防備林や古い堤防がのこっています。笛吹川は約五五キロメートルの路路をくだると釜無川と合流し、富士川となつて駿河湾に流れこみます。お話をふる里をたずね、笛吹川を源流までさかのぼつてみました。こわいあばれ川のお話とはうらはらに、渓谷はさかのぼればさかのぼるほど、おもわず息をのむほどのうつくしさでむかえてくれました。しかし、この清流が濁流となり肥沃な土を運び、豊かな甲府盆地をつくったこともたしかなことです。人々はこの川の恩恵を知ればこそ、くるしめられながらも川とともにくらしてきたのでしょうか。中流の川ぞいにたつ、ごんざぶろうの像にたちよつてみたら、だれがおいたのか、みかんが一つ、ぽつんとそなえてありました。



# てんりゅう 天竜かっぱのしちだいじ

長野県 天竜川

むかし、天竜川に太田切川が流れこむあたりに、天竜かっぱがすむ下り松とよばれる大きな淵があつた。この淵にはござい雨竜がひそんでいるといううわさがあつた。村人はおそれて、だれ一人ちかよろうとはしなかつたが、ここのかっぱたちには雨竜のうわさは都合がよかつた。

「ここで、わしらかっぱが、のん気にくらせるのは雨竜さまが守つてくださつとるからじや。川の水はきれいだし、こんなによい淵は、ほかにはない」

長老かっぱは、いつもこの淵と雨竜をじまんにしておつた。ところがある年のこと、くる日もくる日も雨が降りつづき、天竜川の水かさがどんどんふえた。そこへ太田切川の急流が滝

のようないきおいで流れこんでくる、とうとう大洪水になつてしまつた。こうなつては天竜かっぱのん気にしてはおれない。

「ぐずぐずしてると流されるぞ、淵の底にひなんしろ」

長老かっぱにしたがつて、かっぱたちはいつせいに悲鳴をあげながら淵の底深くもぐりこんでいった。その時だつた。「ガオウッ、うるさいぞ」

淵のおくから、おそろしげな声が、ひびいてきたかとおもうと、すごいきおいで雨竜がまいあがつて来て大あばれをはじめたんじや。

水しぶきがうずをまきながら飛びぢり、川はどこにあるのやら、淵はどこにあるのやら、まったくわからない。かっぱたちは淵の底にしがみつき、なきわめくばかりじやつた。何日かして、やつと洪水もおさまつた。ほつとしたかっぱたちが淵から顔をだしてきました。しかし、外のようすを見ておつたまげた。こんどの洪水で、天竜川の川すじが淵より西のほうに、うつつっていたからじや。

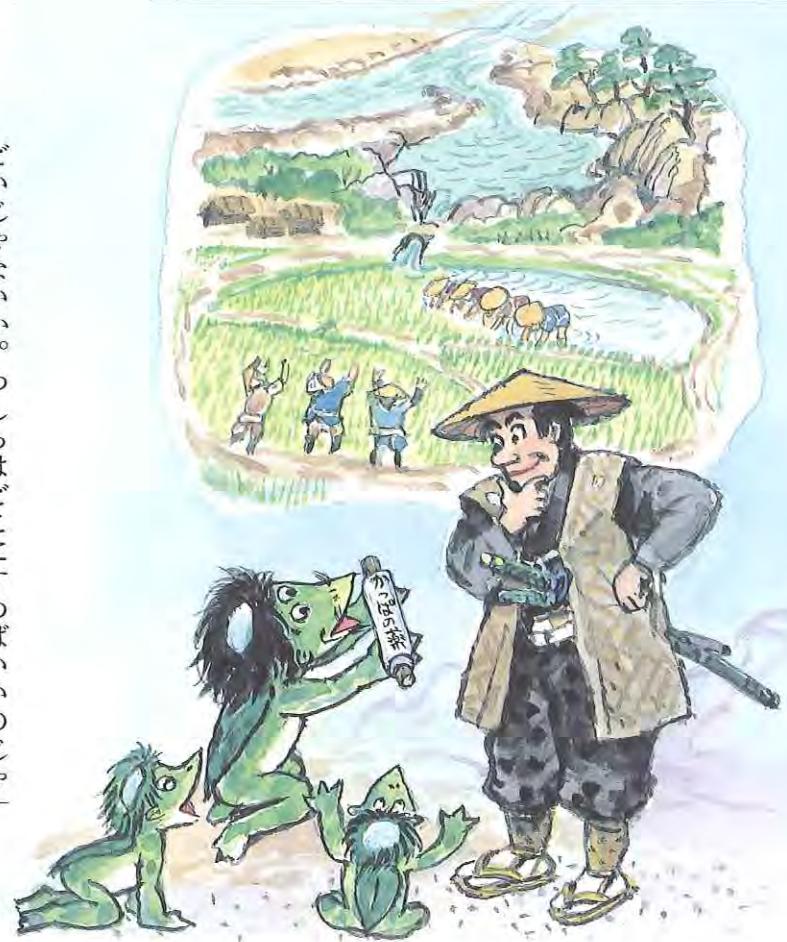
「なんてことだ、下り松の淵が、川すじから切りはなされてるじゃないか。これじや川の水は淵には流れこめない。淵がまるで池みたいになつてしまつた」

長老かっぱは頭をかかえこんでしまつた。そこへ若いかっぱが、いきせききつて走つてきた。

「長老さまたいへんじや。川奉行の中村新六さまが、この淵の水を引いて川下のあれ地を田んぼにするとかで、村人をあつめて淵から水をぬくトンネルをほるそうじや。今に淵の水はなくなるだよ、どうすりやええ」

びっくりしたかっぱたちは泣きべそ顔になつてわめきだした。長老さまはうそつきじや、雨竜さまはわしらを守つてくださるどころか、あばれまわつてわしらをこんなめにあわせてひ





きつとうまくいくはづじや

「おおつ、あれは雨竜さまじや。とうとう天竜になられたんじや。わしは勇気がでてきたぞ、いわれたとおり川奉行の中村さまに、あいに行こう」

すっかり元気をとりもどした長老かつばは、いさんで淵からで草むらにかくれて奉行をまつた。ばかりこ、ばかりこ、馬にのつた奉行が通りかかった時、長老かつばは馬のしつぽに飛びついでさけんだ。

「お奉行さま、それはむごい。わしらかつばの身にもなつてくだされ。雨竜さまは、わしらかつばのために天に登られたといふのに、人間には、なさけというものが無いのですか」

長老かつばは必死になつてたのんだ。お奉行はしばらく考えてから

「かつばよ、わしにいい考えがある。工事は、まず天竜川の水

が、淵に流れこめるようにすることから始めるのじやよ。そ

どいじやないか。わしらはどこにすめばいいのじや」

長老かつばも、かなしくなつて天をあおいた。

その時、雲間からさす光のおびの中を、金色にかがやく雨竜が、天にむかって登つていくのが見えた。そして、かすかに雨竜の声が聞こえてきた。

「もう、おまえたちに、めいわくはかけない。長老かつばよ、中村新六にあいに行くがよい。淵に、わしさえいなければ、

かに雨竜の声が聞こえてきた。

「ひやあ、それはいい考え方じゃ、さすが川奉行の中村新六さまじや。おもしやりがあつて頭もいい。ありがたい、ありがたい」

よろこんだ長老かつばは、飛ぶようにして下り松の淵へ帰つていった。

「ひやあ、それはいい考え方じゃ、さすが川奉行の中村新六さまじや。おもしやりがあつて頭もいい。ありがたい、ありがたい」

うぢやな」

うすれば淵の水がなくなることはない。工事がおわるまで、おまえたちはわしの屋敷にある池でくらすがよい。それでどうじやな」

やがて、工事は村人の力ではかどり、下り松の淵には、天竜川の水がみなみと流れこんできた。淵からは、川下の田にたっぷりと水をおくれるようになつた。中村新六は殿さまからおほめの言葉をいただき村人からも感謝された。そのなかでいちばんよろこんだのは、かつばたちじやつた。

「この淵は、天竜さまが守つてくださつとる、それにお奉行さまのおかげで淵は水でいっぱいじや。こんなによい淵はほかにはない」

かつばたちは、中村新六にお礼として、むずかしい病気をなおす、ふしぎな薬の作り方をおしえた。中村家ではこの薬に「加減湯」と名づけて売りだしたところ、たちまち大ひょうばんになり、末永くはんじょうしたそうじや。

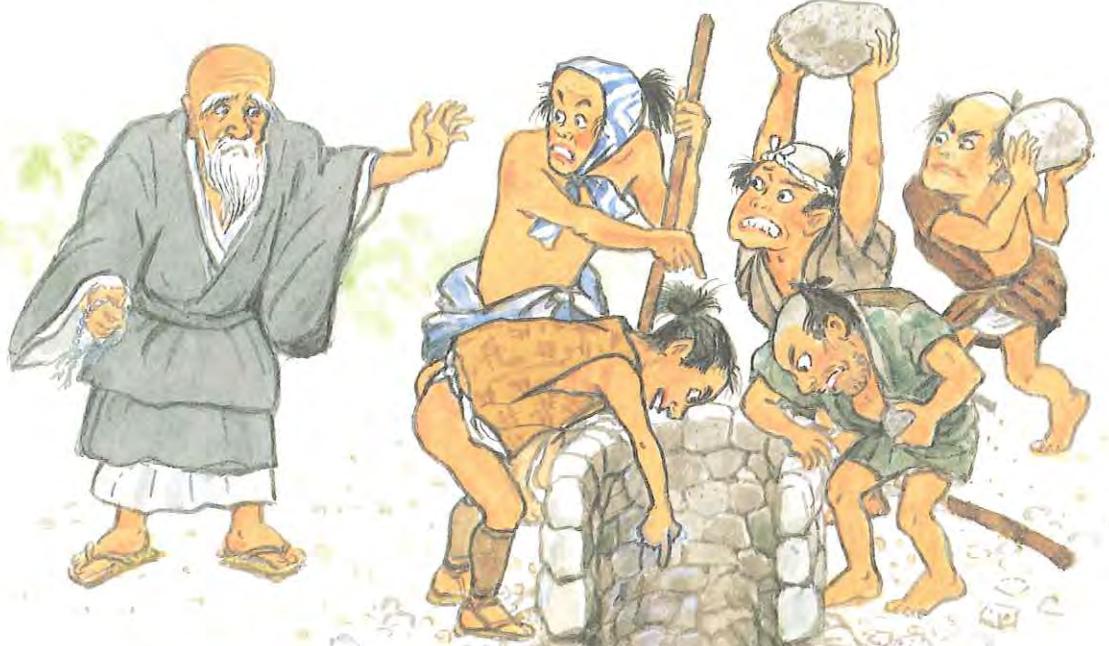


このお話を、長野県伊那地方に伝わる「カツバの妙薬」という伝説をもとにしています。お話をふるさと伊那地方は、中央アルプスと南アルプスにはさまれた伊那谷とよばれる細長い盆地です。そのまん中を天竜川が流れています。伊那谷といつても、比較的、広々とひらけた地域ですが、村も町も田畠や街道も人々のくらしまで、天竜川と深くかかわってきました。天竜川なくしては経済も文化も語ることができない地域なのです。  
伊那谷の駒ヶ根市をたずねると、天龍大橋のたもとに、天竜かつば広場がありました。そこには「おもしろかつば館」があり、庭には馬にのつた中村新六の像やかつばの池、道路ぞいにはかつばの休憩所までありました。これらの施設は、天竜川にたいする関心や親しみを、この地の伝説に登場する「かつば」をとおして深めていつほしいという願いをこめてつくられたもので、駒ヶ根市教育委員会が管理しています。かつば館の展望台からのぞむ天竜川は雄大な木曽駒ヶ岳を背景に、絵のように美しく流れています。

「ハアー 天竜下ればしぶきにぬれる 持たせやりたや檜笠」  
と歌われる伊那谷にぴたり似合う景色が今でも広がっているのです。この天竜川の長さは二三キロメートル、諏訪湖からはじまり伊那地方を南へ流れ遠州灘にそそぎ出ています。

# かつぱ 河童の壺

静岡県 河津川



伊豆にある河津川が、今よりずっと深かったころ、なかでも栖足寺のうら門あたりは、ひときわ深かい淵になつていて、そこに大変いたずらなカツパがすんでおりました。

「川へ行くときは気をつけろ、カツパに足をひっぱられるぞ」

「川底から手をのばして子どもの尻こだまを引きぬくそうだ」

そんなうわさが、だんだん大きくなつて、田んぼに水を引く堰がこわれた時も、畑のきゅうりがあらされた時も、悪いことが起るとぜんぶカツパせいだと、村人たちはおもうようになりました。

ある年の夏、お堂だけだつた栖足寺を、りっぱな寺にたてかえることになり、村人たちもみんなあつまつて手伝つておりました。空が夕やけにそまるころ、その日の仕事がおわります。

「やれやれ、今日も無事に仕事がすんだ。さあ、汗をおとしに川へ行こうや」

そういうつて馬を引きつれた村人たちは、ぞろぞろと川原へやつてきて水あびをはじめました。河津川の水は、ひんやりと冷たくて、人も馬もとても気持よさそうです。

その時でした。とつぜん「ヒヒーン　ヒヒーン」と一頭の馬があはれだしました。見ると、その馬のしつぽに黒いへんなものが、しがみついています。

「ややや、ありやカツパじゃないか」

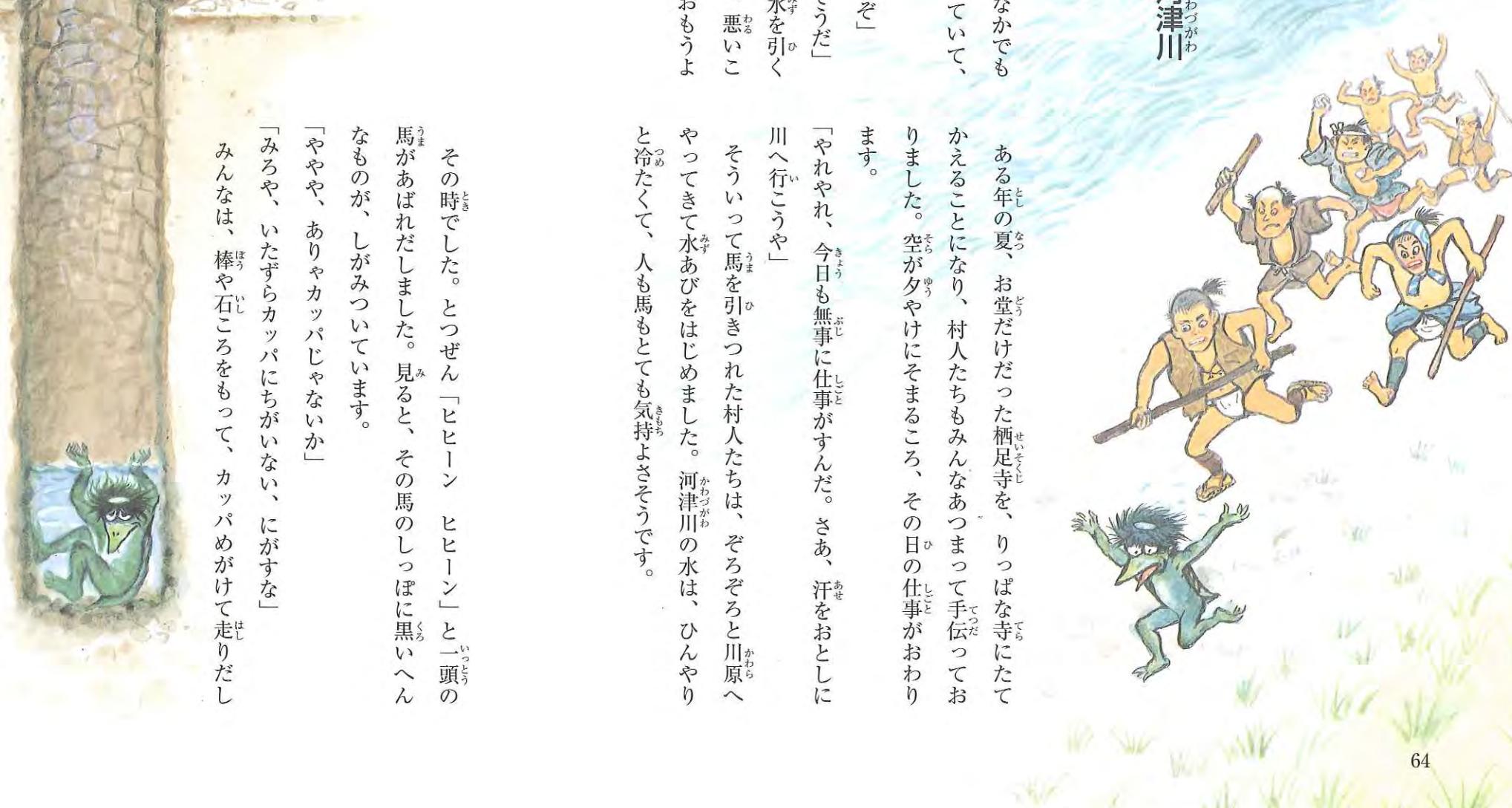
「みろや、いたずらカツパにちがいない、にがすな」

みんなは、棒や石ころをもつて、カツパめがけて走りだし

「ややつ、カツパめ井戸に飛びこんだぞ」

「ばかなやつだ、もうにげられねえ。大きな石をぶちこんで、おしつぶしてやるわい」

「井戸をとりかこんだ人たちは大きさわぎです。」



そこへ、さわぎを聞きつけた、おしようさんが寺から出てきました。

「これこれ、みんなおちつきなされ。いまは寺をたてる大事な時じや。たとえ悪いカツパでも生ものを殺すことはゆるしませんぞ。どうじやここはひとつこのおしようとまかせなさい」

おしようさんにそういわれては仕方がありません。みんなは、すごすごと帰つていきました。おしようさんはカツパを井戸からだしてやりました。

「これカツパ、おまえは、たいそういたずら者のようじやな。いたずらも度がすぎると自分のせいではないことまで、おまえのつみにされるのじや。ここにいては、だれかに見つかって、またひどい目にあわされるじやろう、心を入れかえ、どこかへ行くがよい。これからはけつして、いたずらなんかするでないぞ」

そういうてカツパをにがしてやりました。その夜のことです。雨戸をとんとん、とんとんと、たたくものがいます。

「この夜ふけに、だれじや」

おしようさんが雨戸を開けてみると、たすけてやつたカツパが庭さきに、ぽつんとすわっておりました。カツパはペコ

おしようさんはうつとりとして、その音に聞きいりました。

そのようすを見たカツパは  
「おしようさまにいわれたとおり、わたしは心を入れかえ、これから遠くへまいります。もう一度とお目にかかることはありませんが、時々このつぼに耳をあてて、わたしをおもいだしてください。そして、つぼから水の音が聞こえるうちは、どこかでわたしは元気にしていて、このお寺を守りつづけているとおもつください。では、おたっしゃで」

「おしようさま、さつきはあぶないところを、たすけてくださいがとうございました。

これはお礼のしるしです」

といいながら黒つぼいつぼをさしだしました。おしようさんが手にとつて見るつぼはからつぽでした。

「おしようさま、このつぼは物を入れるつぼではありません。音を聞くつぼです」

と、あわててカツパはいました。

「ほう、どんな音が聞こえるのかのう」

おしようさんは、つぼの口にそつと耳をあててみました。

するとどうでしよう、中からなんともいえないほど気持のよい水音が、さらさらさらさらさら……と聞こえてきます。それは、せせらぎの音でした。すきとおるような水のひびきでした。

「ほほう、これは、なんともこちのよい音じやのう」

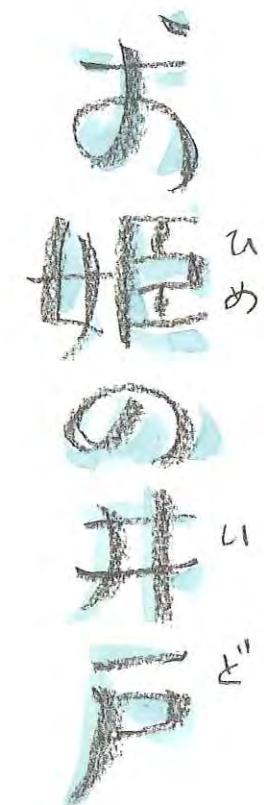
といつて、佩こりとおじぎをすると、とことこと、くらやみの中へたちさつていきました。

それからというもの、カツパは二度とあらわれませんでした。しかし、つぼに耳をあてると、いつでも、さらさらさらさら……と、うつくしい水の音が聞こえてきました。この水音は河津川のせせらぎの音とそつくりでした。そして、この音を聞いた人は、だれでも心の中まであらわれて、やさしいおだやかな気持ちになつたのでした。



ほんとうにあつた河童のつぼと河津川  
河津川は、伊豆半島の天城山中から、名勝地、河津七滝などの渓谷をぬけて流れ下つてきますが、すぐ日の前には雄大な相模湾が広がっています。昔からこの地域の人々は、田んぼの水も生活の水もこの川からもらっていました。水辺は子どもたちにとって最高の遊び場でしたし、うつくしいせせらぎの音は人々に大きなやすらぎを与えてくれていたのです。河津川は心のふるさとでもあつたのです。  
この川は川端康成の「伊豆の踊り子」の舞台になつた場所としても有名です。下流近くの谷津にカツパのつぼや井戸がこのる栖足寺がありました。カツパの恩がえしの話は、各地にいくつもありますがこの話をその一つです。ひとつりとした本堂にすわっていると、カツパが、どこからこつそりと、のぞいているような気がしてきます。そこで、寺の宝として伝わるカツパのつぼを見せていただきました。  
「そつと耳をあてて、聞いてごらんなさい」そういわれて、おそるおそる耳をあてると、ほんとうに聞こえたのです。さらさらさらさら……すつかり、おだやかな気持ちになつて寺をでると、河津川もさらさらとこちよく流れおりました。





岐阜県 長良川

むかしから長良川に大巻とよばれるところがあつてな、そこは上流から激流が大岩にぶつかって、うずをまく深い淵になつておつたそな。

淵の底には、竜神さまが住んでいて、大岩のまん中のくぼみには、竜神のお姫さまが住んでいなさると信じられていた。その大岩のくぼみを、村人たちは「お姫の井戸」と、よんでおつた。

かれこれ三百年ほども、むかしのことじや。

このあたりがひどい日照りつづきになやまされたことがあつてな、たよりの長良川の水も少なくなつて、田や畑に水を引くこともできない、作物はカラカラにかれはじめたんじや。村中で雨乞いの祈りを何度もさげても、ひとつぶの雨も降らない。

「このままじゃ村はほろびてしまう」

村の庄屋の五兵衛は、頭をかかえてなやんでおつたが、はたと頭にひらめいたことがあつた。

「そうじや、竜神さまをおこらせれば、きっと雨が降るぞ」

その夜おそく、なにやら大きな荷物をかついだ五兵衛は、一人でお姫の井戸に向かつたんじや。お姫の井戸には、いつも、きれいな水がたたえられていて、ここをよごすと竜神さまのバチがあたるからと、だれも近づかなかつたところじやよ。そこへ五兵衛はやつてきた。

持つてきたのは、きたないゴミの山じやつた。そして、こともあろうに、お姫の井戸のまわりで、そのゴミをもやしはじめたんじや。



お姫の井戸は、くさいけむりでつまれてしまつたがな。

そのくさいけむりは天高くあがつていつた。すると、またた

くまに黒い雲がもくもくとわきだし、大つぶの雨が、ぱたぱ

たと音をたてて降りだしてきた。

「やつたぞい、わしの思つたとおりじや。龍神さまがおこりだ

したわい」

と、五兵衛はよろこんだ。雨音に目がさめた村人たちも外に

飛びだしてきて

「雨じや雨じや、ありがたや」

と、大さわぎじや。ところが、よろこんだのもつかのまじや

つた。

雨はしだいに強くなり、三日三晩すぎても、やむどころか、

ますますはげしくなつてきた。たたきつけるような大雨は、

村や畑を見る見る水びたしにしていく。五兵衛はおそろしく

なつてきた。まさか、ここまで龍神さまが、おこるとは思つても見なかつたからじや。

「龍神さま、わしがわるうございました、どうかおゆるしを」

五兵衛は天に向かつて手をあわせ、ゆるしをこうたがおそ

かつた。とうとう長良川の土手が切れ、どつとあふれだした

水が村や田畠におそいかかつてきたんじや。

人々は命からがら近くの山へにげのびたが、家や畠は、め

ちやめちやにつぶされてしまつたんじや。

これで龍神さまのいかりも、おさまつたのか、まもなく雨はやみ水も引いた。やつとのことで村人たちも山から帰つて來たが、いくらさがしても五兵衛だけが見つからんのじや。

なんでも、ふりしきる雨の中をふらふらと、お姫の井戸の方へ歩いて行く五兵衛を見たものがいたらしいが、どうやら、それが五兵衛の最後のすがただつたようじや。



### 「お姫の井戸」と長良川

きれいな川をよごしては龍神さまが怒るのはあたりまえです。そうとわかついても村のため、水がほしかった五平衛の気持ちを思うとせつなくなつてきます。この話は「水乞いの話」ですが、川は恵みをあたえてくれる反面おそろしい洪水もたらすということや、自然の川をよごしてはならないという教訓も含まれました。

長良川が岐阜県の美濃橋を通るあたりに今もお姫の井戸があります。現在は流れもおだやかで、うずをまく淵もありません。毎年八月一日には地元の人たちが、お姫の井戸の大岩に、しめなわをはつて水神さまをまつり、夜には近くで花火大会がおこなわれています。

長良川の長さは一六六キロメートル、木曽川と揖斐川にはさまれるようにして伊勢湾に流れています。この三つの川は、むかし下流部で、わかれたり、あわさつたり、入りみだれて流れ、たびたび洪水をおこしていました。そのため三つの川をまとめて木曽三川と呼びならわされています。

# おおさまの悪龍退治あくりゅうたいじ

福井県

九頭竜川

むかしむかし、越前(福井県)に、おおとの皇子と  
いう人がおりました。頭がよく、そのうえ心やさしい  
人だったので、土地の人々は、おおさまとよんでも親し  
み、うやまつておりました。

そのころの越前は、みわたすかぎり湖のような沼原  
で、田や畑にできる土地が少なく、人々の暮らしは、  
らくではありませんでした。そのうえ、わるいことに、  
沼原には黒い龍がひそんでいて時々すがたをあらわし  
ては大あはれするのです。

ある年のことです。あつい雲が空いちめんに広がる  
と、はげしい雨あめが降りはじめました。



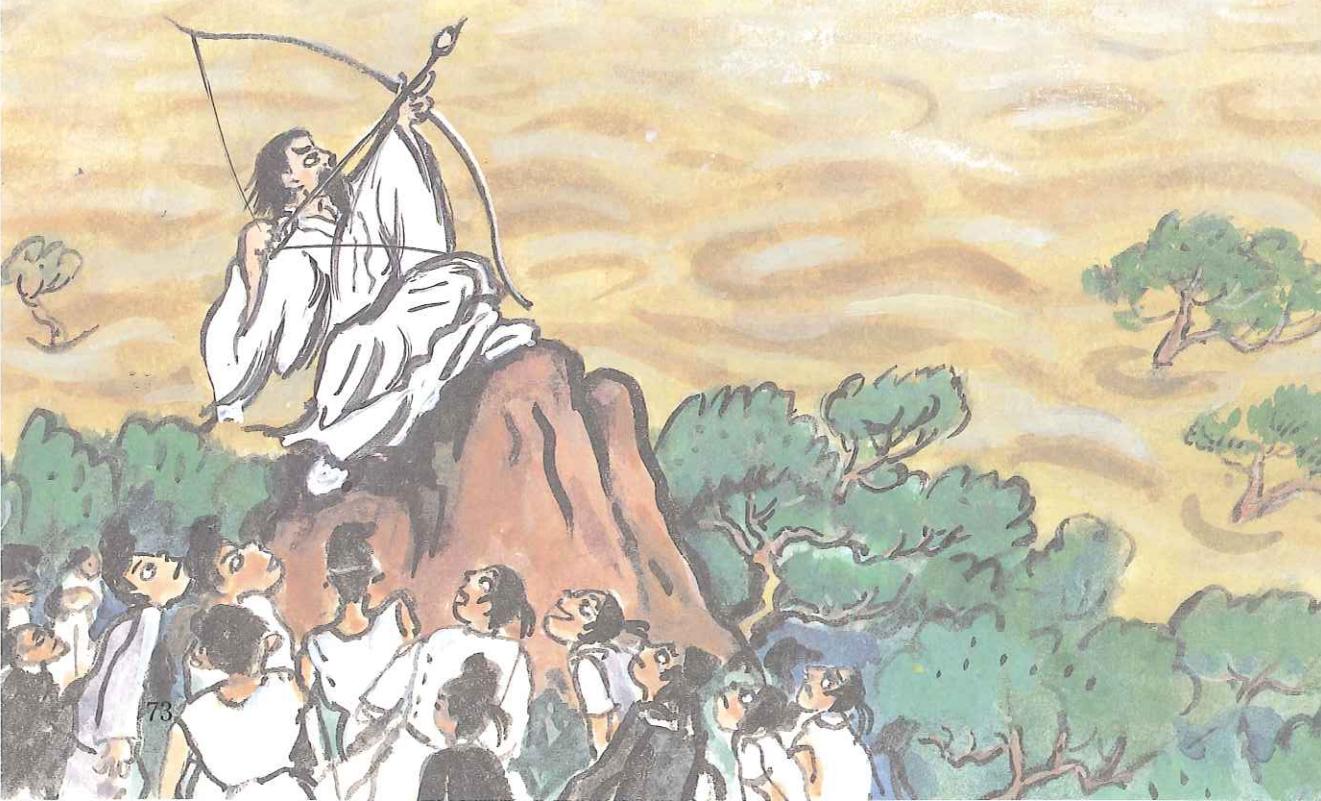
「これはこまつたことになつたぞ。この雨のはげしさは  
黒い龍があはれだす、まえぶれじや」

あたりは夜のように暗くなり、天をさくような、か  
みなりがとどろき、雨はますますひどくなりました。  
人々は丘や山すそこにげていきます。

まもなくして地の底から、わきだすようなぶきみな音と  
ともに黒い龍りゅうがすがたをあらわしたのです。するといき  
ばをむき、とがつたせびれをくねらせて広い沼原をとこ  
ろせましとあはれはじめたのです。ごうごうとうなり声  
をあげ、それはそれはおそろしいすがたでした。

こうして黒い龍は、二日間さんざんあはれまわつて、  
やつと泥水の中に姿をかくしました。そのせいで田や  
畑はすっかり流ながされて、あとかたもありません。住む  
ところさえうしなつた人々は、かたをよせあつて泣く  
ばかりです。そんな人々のすがたを見て、おおさまの  
心はいたみました。

「黒い龍め、もうがまんできない。わたしが、たいじす  
るから、みんなもついてくるがよい」



おおさまは、大きな弓矢を手にすると、足羽山に登つていきました。みんなは、何が起ころのかと、おおさまのあとにしたがいました。

足羽山の上からは、どろ海となつた沼原の水の、海への出口をふさいでいる岩山が見えました。

「あの岩山を切りひらくのじや。そうすれば、どろ水は海へ流れ出て悪竜はすめなくなる。みんなも安心してくらせるし、よい田をふやすこともできるのじや」

おおさまは手にしていた弓にかぶら矢（音の出る矢）をつがえ、岩山めがけてきりりと引きしばり

「天の神、地の神、國の神、われに力をあたえたまえ」

大きな声で祈ると、さつと矢をはなちました。

ビューン するとい音をひびかせて矢は空高くまいあがり、沼原の上をぐるぐるまわると岩山をこえ海に向かつて飛んでいきました。するとどうでしょう。矢のあとを追うかのように、どろ水はごうごうと岩山におしよせ山の一部をくずし、海へと流れこみはじめたのです。

しばらくすると矢がもどつてきて、また沼原の上をぐるぐ

るまわり海の方へ飛んでいきました。どろ水は今度も矢をおつて岩山を切りくずしながら海へと流れ出でています。

矢はまたもどつてくると、前と同じように沼原の上をぐる

ぐるまわり海へ向かつて飛んでいきました。こうして三度目には、とうとう大きな岩山もくずれ、どろ水はすっかり海へ流れ出でいきました。

「おおう、どろ水がひいて土地がみえる、ありがたい、ありがたい」

おおさまも人々も、なみだをながしてよろこびました。矢はもう一度もどつてきましたが今度はぐるぐるまわらずに足羽山のふもとにつきささりました。

人々は矢がささった場所を立矢とよび、そこにお宮をたて矢立大明神として矢をまつりました。さらに、どろ沼の主、黒い竜も黒竜大名人として神社をたててまつりました。水がひいたあの沼原には、大きな川があらわれました。この川は黒竜川（くずりゅうがわ）とよばれ、きれいな水を運んでくれる、ありがたい川として人々に愛されるようになります。こうして越前の沼原は豊かになつたということです。

### 九頭竜川と治水伝説

お話をでてくる黒竜川は、現在の九頭竜川のことです。  
福井県で一番大きな川で、長さは一六キロメートルです。この川を、昔は九頭竜と書かず、黒竜と書いてクズリユウと読ませていたそうです。福井県には、おおさまと慕われた男大蛇皇子（後の繼体天皇）の治水伝説がいくつも残されていますが、「おおさまの悪竜退治」のお話は、残された伝説をもとに、川と治水とのかかわりを、よりわかりやすくするため、新たに再話したもののです。

お話をあれくる黒い竜は、九頭竜川の洪水の恐ろしい姿をあらわしています。おさまの射た矢は、三回往復して岩山を切り崩しました。それは、おおさまの指揮で人々が、何度も何度も河口をひろげたり、湖沼の水を川へ流し出したり、川の流れの整理をするなど、根気よく治水に取組んだことを物語っているのです。

だからといって、当時の治水工事だけで現在のようなりっぱな福井平野ができたわけではありません。繼体天皇のころといえども、今からざつと一五〇〇年も昔です。そんな大昔から、人々は川と取組み平野を開拓してきたのです。福井市がある足羽山にのぼると、大きな弓をもつた繼体天皇の像が建っています。今でも九頭竜川の河口を向いて、この平野を守りつづけているかのようでした。



あね

いもうと

# 姉川と妹川

滋賀県

姉川



むかし、伊吹山のふもとに、それはそれは、なかのよい姉あねと妹いもうとが一人きりで、くらしていました。

「あの二人むすめは、なにをするのも、どこへいくのも、いつしょじやよ。あんななかのよい姉妹しまいは見たこともないのう」

村人むらびとたちは、いつも、あたたかく一人を見まもつておりました。ある年のことです。伊吹山いぶきやまいつたいに降りだした雨あめがいつこうにやみません。くる日ひもくる日ひも雨ばかり、とうとう半年間はんとせんにもなりました。それでも雨は降りつづけておりました。

その雨を、伊吹山いぶきやまの森もりは、すいこめるだけすいこみ、山のお腹なかは水みずでぶくぶくにふくらんでいました。

「伊吹山のお腹なかがいくら大きても、これ以上いじょう雨あめが降りつづけ

ば、はれつするかもしねんぞ」

「そうなつたら大変たいへんじゃ。大水おおみずがでて、田んぼたんぼも家いえも流ながされてしまふがな、こまつた、こまつた」

村人むらびとたちは、どうしてよいかわからずハラハラ、オロオロするばかりです。そんなすがたを見てなかのよい姉妹しまいの心はいたみました。

「このままでは、ほんとうに大洪水だいこうずいが起おこり、だれ一人ひとりたすからないかもしねないわ」

「姉ねえさん、なんとかして村人むらびとたちをたすけましょうよ」

ひそひそと相談そうだんしていた一人は、なにか決心けっしんすると、おもいきつたように家いえを飛びだし、伊吹山いぶきやまのお腹なかをめざして登のつていきました。山やまの地面じめんはふくらんで、ぐしょぐしょです。一人はどろだらけになつて、しげみを、かきわけかきわけ、登のりました。

すると、とつぜん山もりの森からぬけだして、大きな池いけのまえにでました。池いけの水みずは、もりあがるほどいっぱいで、まわりの土手どては、ぶるぶるとふるえ、いまにも、はちきれそうです。「姉ねえさん、ここが伊吹山いぶきやまのお腹なかなのね」

「そうよ、ぐずぐずできないわ。わたしたちの出番が来たのよ、さあ、いくわよ」

「はい姉さん」

二人は、目くばせをあいずに、さつと身をひるがえして、池に飛びこんでいきました。すると一面が見えなくなるほど水しぶきがふきあがり、中から二ひきの竜があらわれたのです。そのからだは、すきとおるような銀色のうろこで、キラキラかがやいています。うつくしい竜に変身した姉と妹でした。そして、姉竜と妹竜は、ふた手にわかれて山をくだり

しかし、これまでいつも、いつしょだつた二人です。はなればなれになつてみると、姉竜は妹のことが心配でなりません。妹竜は姉がこいしくてなりません。

二人は山からくだと、姉竜は妹を、妹竜は姉をさがしてまわり平野のはずれで、やつとであります。ようこんだ二人は、だきあうように一つの川になつて、なかよく琵琶湖へと流れこんでいつたのでした。

おかげで、大洪水は起ころらず村はたすかりました。人々は感謝の気持ちから、姉竜がとおった川を「姉川」、妹竜のとおった川を「妹川」とよび、今でもこの川を愛し大切にしているのです。



### お話の川と人々

滋賀県の湖北地方を代表する一本の川があります。「姉川」と「高時川」です。お話を聞いてくる姉川とはこの地方にのこる呼び名で、実は「高時川」のことです。姉川の支川の中では最大の高時川を妹になぞらえて妹川とも呼ぶようになりました。

さて「姉川と妹川」のお話は姉妹の竜が主人公です。昔から川は竜にたとえられることが多いのですが、洪水を起こす川が、まるで竜のように激しくて恐ろしい姿に見えたからでしょう。実際に姉川も高時川もたびたび洪水をおこしては村人を苦しめてきました歴史があります。ところがお話の中では、この二つの川を悪者にはしていません。それどころか心やさしい姉と妹にたとえています。そして姉川と高時川(妹川)があればこそ、どんなに長雨が続こうとも、伊吹山にあふれる水は琵琶湖へと流しされ、大洪水から救われるし村人も助かる、ということになっています。

こわい竜や洪水の話は数多くありますが、竜にたとえられる川をこれほどまであたたかな日でみつめた話はめずらしいのです。きっと湖北の人たちは、姉川も高時川もかけがえのない川として愛し親しんできたのにちがいありません。そう感じさせられるお話です。

はじめたのです。そのあとをおうように、伊吹山のお腹にたまつた水も、ふた手にわかれ流れだし、二本の川になります。

# おねじやだぬき

二重県 員弁川

ずうつと むかし、二重県の笠田新田にあつた話や。

庄屋さんの大きな屋敷にすみついておつたふるだぬきは、ばけるのがとくいで、いつも、いたずらばかりしておつたど。里の家でな、トントンツ トントンツと、たたくものがおるので

「どなたかいのう」

と、戸を開けると、でつかい大入道の顔が戸口いっぱいにのぞいとる。これには、だれでもびっくりするでえ。あわてて戸をしめると、かなはずどこかで

「おねじや おねじや」

と、からかうように小さな声がするんやと。ふるだぬきのやつ、庄屋さんの口ぐせの「おれじや おれじや」というのを、

まねしとるらしいのよ。村人も、そんなことくらいわかつとるので「おねじやだぬき」とよんではかにしておつた。

ところで、笠田新田にはこまつた問題があつたんや。このへんの川は小さいうえに、水が少なくてな、田んぼの水をとりあつて村どうしで、すぐけんかをはじめよるんじや。

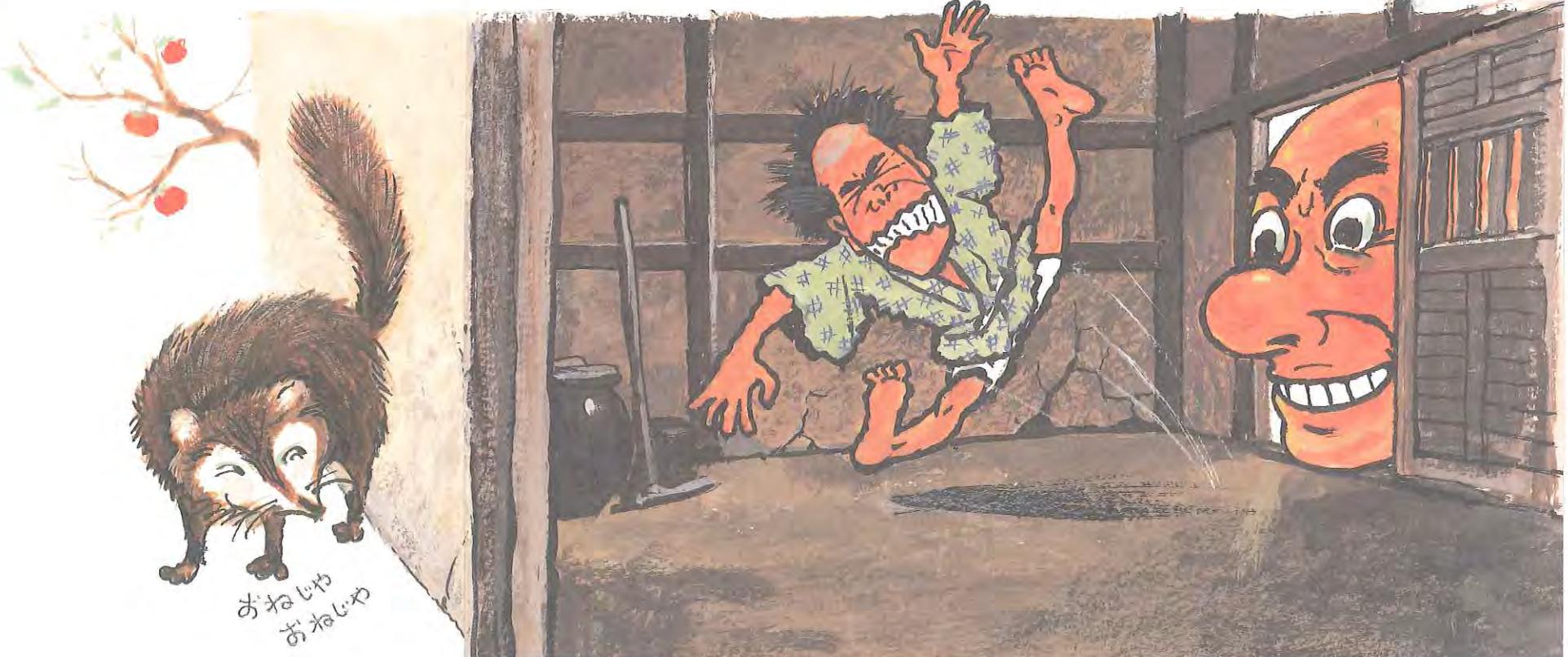
川上の田にたっぷり水をひくと、川下の田にはちょっとぴりしか水がまわってこない。川下のお百姓もたっぷり水がほしいから、こつそり川上のあぜを切つて自分の田に水を引きこむ。今度は、水をとられた川上の百姓がおこつてどなりこむ。日照りつづきで水がれにでもなれば、それこそ大変や。ボウやクワなどを持ち出してなぐりあいまでおこるんや。庄屋さんは水あらそいをやめさせようとなやんでおつた。

ある時いいことをおもいついてな、さっそく石屋さんをよぶと日影石といいうものをこさえさせたんや。これは日時計でな、石の影のむきによつて時間をきつちり二つに分けることができる。そして、それぞれの時間のぶんだけ川から水を引けば公平になるとおもつたんや。

「これでもう水あらそいはなくなるでえ」

太兵衛はびっくりして、近くの茶屋ににげこんだ。

おねじや  
おねじや



茶屋のおやじは気が強いし元気もんや。

「そりや、おねじやだぬきにきまつとる。わしが、おっぱらつてやるからついて来いや」

手ごろな棒をつかんだ二人が、土べいのところにかけつけ  
ると、さつきの大入道が、稲のたばをこわきにかかえて、ま  
だ立つとつた。

「こら大入道め、おまえの正体なぞとつくにわかつとるわい。  
たぬきはたぬきらしく穴ぐらにでもすつこんでろ」

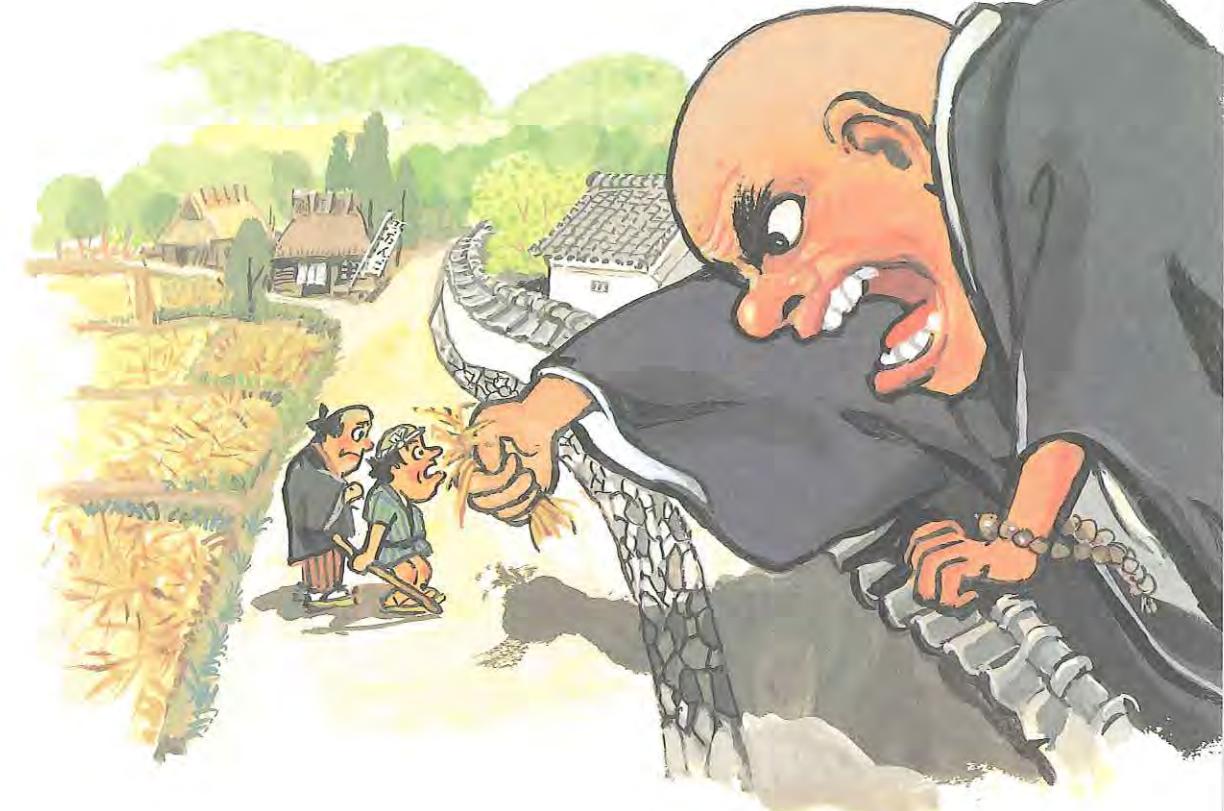
茶屋のおやじが、いさましくボウをふりあげると、いきなり  
大入道はでつかい声で、どなりかえしてきたんやと。

「だまれつ このあほうめが、おまえらが水あらそいばかり  
しとる間に、ほれ、この稲を見てみい、かりかりにかれてし  
もうとるわい」

太兵衛もまげずにいいかえした。

「そんなことわかつとる、だから日影石をこよとえたんじやい」

「やかましい、日影石なんかつくつても自分さえよけりやい  
いという根性では、また水あらそいは起ころんじや。相手の  
身になつて考えられんうちは日影石もただの石ころよ。まず、



自分たちがなかよくなることじや、わかつたかあ」  
太兵衛は、おもわずこつくりうなずいたが、そのとたん  
大入道はパッと消えてしまふてな、どこからか「おねじや  
おねじや」と、聞こえてきたそや。

二人は庄屋さんの家にいくと、今おこつたことを、のこら  
ず話したんや。

「うーん なるほどなあ」

### 水あらそいがお話をなつた

にくめない、いたずらものおねじやダヌキ。楽しくて、あたたかみのあるお話です。ところがこれは、じつ  
は深刻な水あらそいのお話です。水あらそいは、この地にかぎつたことではありません。古くから、日本中い  
たるところに激しい水あらそいの歴史がのこつています。けが人ができるだけでなく、死人がでたところもあつ  
たほどです。こんな水あらそいをいくらづけても、水不足を解決することはできません。人々は、もつと良  
い方法を考えねばなりませんでした。お話には日影石という日時計がでてきました。当時、水の配分のきまり  
として、役立てられたものです。この日影石はいまでも員弁町にのこつていて有形文化財となつてています。  
一本の川の水にたよつてくらしていたお百姓さんたちの苦労がしのばれます。おねじやダヌキは「そんなもの、  
何の役にも立たん。もつとなく考えろ」と人々をいさめました。人々は、けんかをするより、みんなで力  
をあわせ、川を大切にし、ため池をつくつたり、あたらしい水路を掘つたりして、どの田にも水がいきわたる  
ように知恵をしほったのにちがいありません。現在の員弁川は長さ約三七キロメートルの短い川で伊勢湾にそ  
そぎ出でています。



# くにしぶち 國主淵

和歌山県 貴志川



むかし、紀ノ川すじでな、そりや、ながいながい日照りがつづいた時のことや。

紀ノ川に流れこむ貴志川も、からからになつての、川の水は国主淵にしか、なくなつてしまふたんや。それでも川ぞ

いの村人らは

「国主淵の水は、いくらでもわくさかい心配ない」

ちゅうて、毎日せつせと水をくみにきよつたが、そのうち、だんだんと心配になりだした。それとも、この年にかぎつてな、水がわいてこんのや。

「えらいこつちやで、これまで、いちどもかれたことない淵の水が、へつてきとるがな。これじや、なんば国主淵でも、いまに、かれてしまうでえ」

「なんとかせなあかん」

貴志川ぞい十四の村の庄屋があつまつて雨乞をすることになつたんや。それも、わざわざ高野山のお寺から火なわをいただいてきて雨乞の祈りをささげたんや。

しかし、いつこうに雨が降りだすけはいもない。こまりはてていたところに変なうわさが伝わってきたんや。

「国主淵の底には竜宮までとどく大きな深い穴があつてな、そこから水がわきだしとるんやが、穴の入口をなんかがふさい

どるらしいでえ」

「なんや、そんなことかいな。そんならふさいどるもん、どかしたらすむことや」

「ほんならおまえがどかしに淵にもぐつてくれるんか」

「そりやあかん、あんなおそろしげなどころに、もぐれるやつなど、おらんでえ」

「そうや、ええことおもいついた。土地のおさむらいに、たのんでみたらどうかいのう」

というわけで、桜井刑部という村で一番強いおさむらいが、えらばれたんや。えらばれたからには、ぜつたい失敗はできんと考えた刑部は、自分がつかえる橋本家のおやかたさまが貸してくれた国次という名刀を背中にしばりつけ国主淵へでかけていつたんや。

さすが刑部、どきようよく、淵にざんぶと飛びこんで底へ底へと、もぐつていつたがな。そしたら、暗くてはつきりわからんけど、うわさどおり淵の底に大きな穴があつてな、なんやしらんが太い松の根みたいなものが穴の中に入つてふさいどつたんやて。

刑部は、それを両手でひっぱりだそうとしたけど、びくともせえへんのや。しかたないから今度は刀をぬいて、ぶすつと、つき立てみたんやと。ほいたら松の根が、ずるつと、くねるように動いて穴からぬけできよつた。なんとそれは竜やつた。

竜はすごい顔をして刑部に向かつてきたんやて。さすがの刑部もびっくりしたが、まけるわけにはいかない。必死になつて竜に切りつけていつたんやて。

竜のからだからは血がふきだし、淵の底が見えないようになつた時や、にごつた水は大きなうずまきになつてな、パリ

パリつと、いなずまが光つたかとおもうまもなく竜は天高くかけのぼり、黒い雲の中に消えていつたんやて。

ほいたら黒い雲から大つぶの雨が降りだしたんや。おまけに淵の底から、うつくしい水がどんどんわきだしてきて、みるとまにいっぱいになつてな、貴志川も流れはじめたといつこつちや。

その時、もう一つふしぎなことがあつてな、刑部が岸にあがろうとしたとき、能のお面が、ぶかぶかと、たくさんうかんできて刑部を見てるんやて。刑部はそのうちの三つのお面だけ持ち帰つたそや。

その後、日照りがつづいたとき、刑部がひろいあげたお面をつけて雨乞したら、かならず雨が降つてきたんやと。

竜も一度と国主淵にもどることもなくなつて、どんなに日照りがつづいても、淵の水がかれることができなくなつたんや日照りがつづいても、淵の水がかれることができなくなつたんやうな世界がくりひろげられることでも有名です。



## 紀ノ川と貴志川



このお話は、和歌山県貴志川町に伝わる民話を再話したもので

す。この地域の人々は今でも貴志川の水にたよっていますが、ダムなどで水を貯えることができなかつた時代では、川の水がかかるということは命にかかわる大問題でした。一本の川の水にたよつてきた人々のくらしがこの話を生んだのでしよう。

貴志川の全長は約四五キロメートルやがて紀ノ川に合流します。本川の紀ノ川は和歌山県を代表する長さ一三六キロメートルの河川で、有吉佐和子の小説「紀ノ川」で全國的に名を知られるようになりました。貴志川町にある「きしべの里公園」は国主淵の近くにあり六月初旬ゲンジボタルの幻想的な世界がくりひろげられることでも有名です。

# とってもつきない七種のたね

なぐさ

兵庫県 市川

ずうつと、むかしのこと。播磨の国（今いまの兵庫県）を流れ  
る市川の川上に草深い村里があつた。ある年、くる日もくる  
日も日照りがつづき、もう百日あまりもひとつぶの雨もなく、  
田んぼも畑もからからにかわききつておつた。

「これじやあ、この冬をこす食べものもとれんわい」

「それどころじやないぞ、来年まく米や大豆の種さえのこせん  
わしら百姓に種がなけりや、どうすりやええんじや」

村の百姓たちはとほうにくれておつた。そんなある日のこ  
と一人の若者がたきぎをとりに山へでかけたが、知らず知ら  
ずのうちに深い山おくへと入つてしまつた。するとなんとも  
いえぬふしきな音を耳にした。

チロチロ チ チロチロ チチチロチロ

「はて、なんの音やろか、それにしても、ここちよい音やなあ」



近づくにつれ音は大きくなつた。チロチロ シヤラシヤラ  
チロチロ ザワザワ。のぞくとそれは小さな川の音じやつた。  
「おうつ、水じや、水が流れてる」

むちゅうになつて流れをさかのぼつてゆくと、今度はゴゴ  
ゴウーッと体にひびくような音が聞こえはじめ、パツと目の  
前がひらけたかとおもうと見事な滝がしぶきをたてていた。  
「ひえ、百日あまりも雨が降つとらんのに、この滝の水はどう  
うなつてるんかなあ」

若者は滝をこえ、さらにおくへと登つてゆくと大きな岩の前に  
いでた。気がつくと、あたりはいつのまにか深い森につつまれ  
ている。

「そろそろ、このあたりが川のもとかもしれんぞ」  
若者は心ぼそくなつて、きよろきよろみまわしていると、  
とつぜん

「これえ、おまえは何者じや」と、頭の上から大きな声がふつてきた。「うひやあああ」若者は  
心臓がとまるほどびっくりした。見ると、まつ白なひげをな  
びかせた老人が大岩の上にかがやいて立つておつた。



れ、来年まく種もないそうじやが、ほんとうか

「は はい、そのとおりでございます」

「うむ、それは気のどくなことじやのう。よしよし、せつかくここまで来たんじやから、わしがええことを教えてやろう」

川人はそういうと太い一本の杉の木をゆびさして

「その木の根もとをほるがよい」

といつてクワをさしだした。若者はいわれるままにほつてゆくと平たい石の下からひとつみの小さなふくろがでてきた。

「それを、おまえにやろう、その中には種が入つておる、それ

をまくがよい」

「種、種でござりますか、なんとまあ、ありがたいこと」

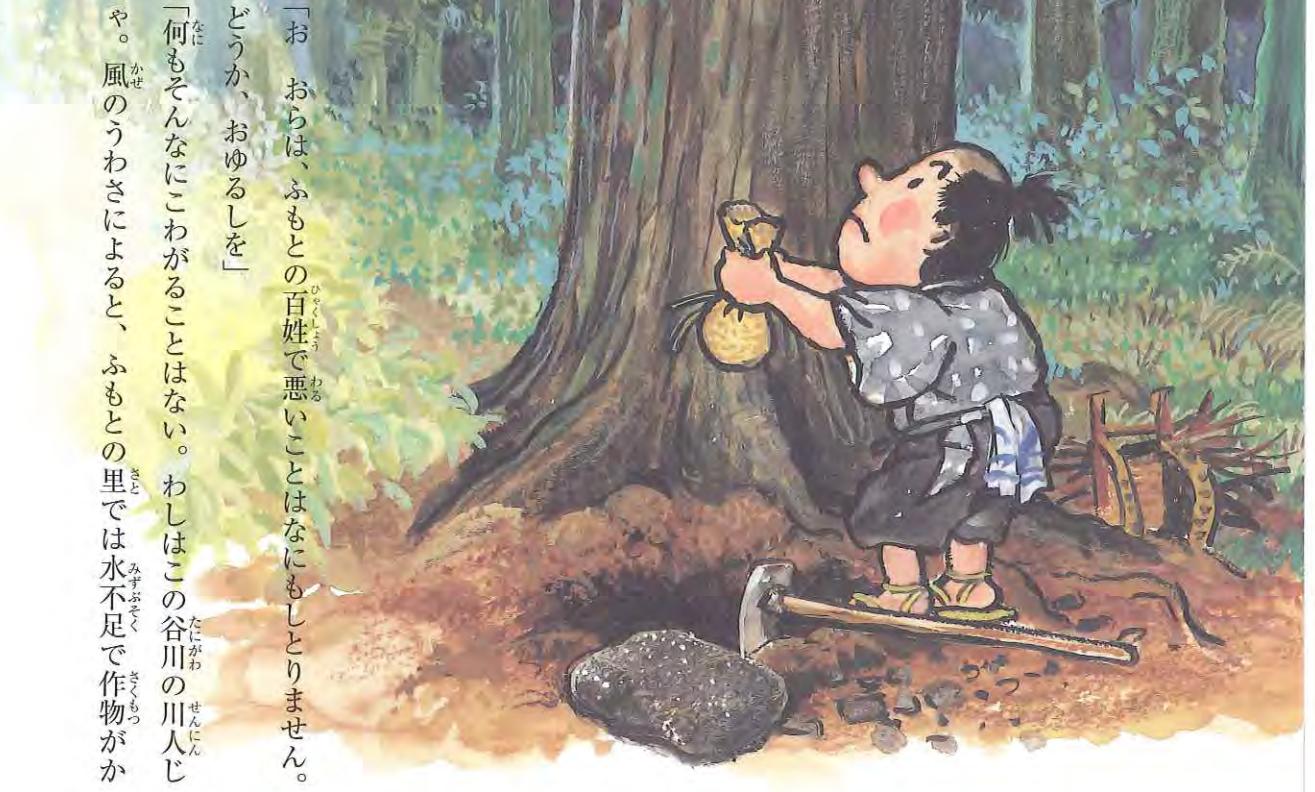
ふくろをおしいただいて顔を上げると、もう川人はかすみのようく消えていて深い森だけがしずまりかえつておつた。

「ありがたや ありがたや」

若者はもらつたふくろを、しつかりとかかえて村へ帰つた。

「さあ、みんなあつまつてくれえ、おらの話を聞いてくれ」

何事かと村人たちはあつまつてきた。若者が今日のできごとを話しながらふくろをあけてみると、米、麦、アワ、ヒエ、



大豆、アズキ、キビの七つの種がひとにぎりずつ入つておつた。

「さあこれでせんぶじや」

「でもふくろは、まだふくらんどるぞ、のこつてるならわけてくれんかのう」

「おや、ほんとにまだ入つとる、ええともええとも」

若者は、種をつかみだしてわけてやつた。

「おやおや、まだふくらんどるわい、おらにもわけてくれんかのう」

「あれれ ほんとじや、ええともええとも」

そのようにして、つぎつぎと種をわけてやつた。ふしぎなことにふくろからは、とつてもとつても、つくることなく種がでてきたんじや。

それ以来、この村は七種村とよばれるようになつてな、滝は「七種の滝」、川人にあつた山は「七種山」、川の名は「七種川」と、よばれるようになったそうじや。

### 森が川を育て、川の水が作物を育てる

このお話は水不足に苦しむお百姓さんのくらしが語られています。水がなければ、どんなにいっしょくんめい働いても作物は育ちません。その水を運んでくれるのが川です。

つまり、お百姓さんのくらしと川とは切りはなせないです。お話の中で、川人があらわれた川の源流は深い森でした。森は降つた雨をしつかりと地中にためてくれます。その水が少しずつわきだして川になるのです。天気のよい日がつづいても川の水がなくならないのは、この森のおかげなのです。お百姓が大きな木の根元を掘ると作物の種がでてきました。とつてもとつてもつきない種でした。ひょっとして、このふしぎな種は、水のことかもしれないですね。お話では、「仙人」のことを「川人」とあらわしていますが、ここにでてくる「川人」は、川そのものであるといいたかったのかもしれません。

そんなことからちょっといたずら気分をだして「種」を「水」におきかえるおし、作物はゆたかにみのつた」ということになります。

ところで、七種川は市川の支川で短い川です。市川は、兵庫県のほぼ真ん中を流れる長さ七三キロメートルの川で、ゆつたりと瀬戸内海にそそいでいます。



# 西日本の民話

にしにほん

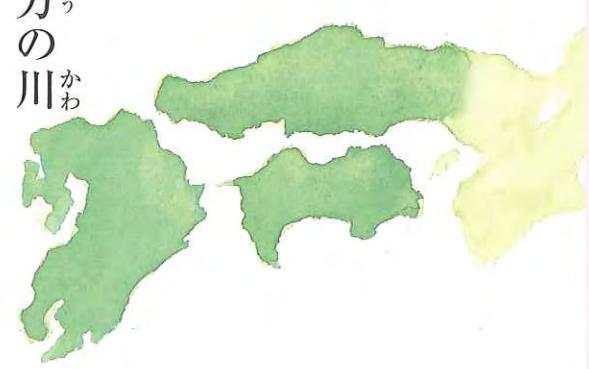
中国

四国

九州地方の川

みんわ

かわ



# はんざき物語

ものがたり

岡山県  
おかやまけん

旭川  
あさひがわ

今から400年ほども昔のはなしです。岡山県を流れる旭川の上流に龍頭が淵とよばれる深い淵がありました。まわりには木がおいしげり、無気味なほど静まりかえっています。淵にそつて一本の道が細々とつづいていましたが、めつたに人が通ることもありません。というのもこの淵にはおそろしいわざがあつたからでした。

「そうなんよ、村のものならだれでも知つとるでえ、あの淵にはな、ばかりかいばけものがすんどるのよ」

「そのばけものは、はんざききちゅうてな、淵の底からいきなりあらわれると、でつかい尾おをふつてな、人でも牛でも淵にかかりこんで、あつというまにのみこむんやてえ」

こんなうわざがひろがつたのではとても淵のそばなど連れません。川上の村に行くのにも、ひと山やまもふた山やまもこして、遠まわりするしかありません。村人むらびとたちはたいへんこまつておりました。そんな村人むらびとたちのこまつたようすを聞いて、村はずれにすむ三井彦四郎みついひこしろうという若者わかものが

「はんざきがどんなばけものかしらないが、わしが退治たいじしゃる」

「おどろいたのは村人むらびとたちです。」

「そりや むちやじや ひとのみにされるけん」

「ばかなこと やめとけやめとけ死しに行くようなもんじや」  
みんなは止めようとしましたが、彦四郎ひこしろうはいつこうに気にするようすもなく淵ふちへとでかけていきました。

淵ふちにやつてきた彦四郎ひこしろうは腰こしにひもをむすび、短刀たんとうを口くちにくわえるとザンブとばかりに淵ふちにとびこんでいきました。そのようすを村人むらびとたちは、とおくからおそるおそる見ておりました。ところが、しばらくたつても淵ふちはいつもどおりに静まりかえつたままです。

「こりやいけんなあ 彦四郎ひこしろうのやつ はんざきにのみこまれたかもなあ」

「だからやめとけというたんじや」

と、村人むらびとたちが話はなしあつてゐるときでした。淵ふちの水面すいめんに赤黒あかくろい血ちのようなものがうかびあがつてきただとおもうと、つづいて大きなはんざきが、うかびあがつてきたのです。

「たいへんじや はんざきがでできよつたあ」



「ややや よう見てみい はんざきが口から血くちをだして死しんどるでえ」

「村人むらびとたちは大きさわぎしながら死んだはんざきをひきあげました。するとはんざきのお腹なかを内うちがわから短刀たんとうで切りさきながら彦四郎ひこしろうがはいだしてきたのです。」

「ありやありやあ こりやあ おどろきじやあ」

「のみこまれてから はんざき退治たいじするとはなあ さすが彦四郎ひこしろうじや」

「これで淵ふちの道みちも安心あんしんして通れるでえ ありがたいことじや」

「彦四郎ひこしろうのはんざき退治たいじはひょうばんになり、ちかくの村々むらむらや旅人たびびとにまで、かんしやされました。」

ところが、このことがあつてまもなくのことです、村むらにへんなうわさがたちはじめました。

「このごろ毎晚まいばんのことや 真夜中まよなかになるとな彦四郎ひこしろうの家の戸とをどんどん どんどんとたたきながらな 泣なきさけぶ声こゑがするんやてえ」

「たたりじや はんざきのたたりじやあ」

「あの泣なきさけんでいた声こゑは はんざきの靈れいじやつたのよ」

「村人むらびとたちは、はんざきや彦四郎ひこしろうのことはきのどくだとは思ついてても、その後なにもしていないことに気がつきました。さつそく村中むらじゅうでそうだんし、はんざき大明神だいみょうじんの祠ほこらをたててまつり、彦四郎ひこしろうの靈れいもまつてなぐさめました。こうして村にはやつと平和へいわがもどつてきたのでした。」

「だれが泣ないとるんや」

「それがな氣味悪いことに戸とをあけてもだれもおらんのやて」「こわいこわい」

「おそれた村人むらびとたちは、日が暮くれると戸とをしつかりしめて、外そとにでるものはないなくなりました。そして、にぎやかだった彦四郎ひこしろうの家いえにも、だれも近づかなくなりました。おまけに不幸つづきで、とうとう彦四郎ひこしろう一家は死にたえてしまつたのです。そればかりではありません。無気味なことが村にまでおこりはじめたのです。きれいな旭川あさひがわの流れがわけもなくにごつたり、はやり病やまいいがおこつたり、水みずがかれたり悪いことばかりがつづきます。」

「たたりじや はんざきのたたりじやあ」

「あの泣なきさけんでいた声こゑは はんざきの靈れいじやつたのよ」

「村人むらびとたちは、はんざきや彦四郎ひこしろうのことはきのどくだとは思ついてても、その後なにもしていないことに気がつきました。さつそく村中むらじゅうでそうだんし、はんざき大明神だいみょうじんの祠ほこらをたててまつり、彦四郎ひこしろうの靈れいもまつてなぐさめました。こうして村にはやつと平和へいわがもどつてきたのでした。」

### はんざきが棲むといつ旭川あさひがわ



このお話を岡山県湯原町の伝説でんせつを再話したものです。お話の中から、人の勝手で川の生きものをむやみに殺してはならない、大切にしていかねばならない、という昔の人たちの教えを感じさせられるお話でした。「はんざき」とは、国の特別天然記念物とくべつてんねんきもつに指定されているオオサンショウウオのことです。大きなものでは体長たいじょうが1メートル以上いじょうになるという世界最大せかいさいだいの両生類りょうせうるいです。お話のはんざきのように人や牛うしのみこむようなオオサンショウウオなんていませんが、もともと生命力せいりょりょくがつよく、なかには100年も生きるものもいるそうです。

「はんざき」という地元じもんでの呼び名には、身体からだを半分はんぶんさかれて生きていたとか、大きな口くちをあけると身体からだが半分はんぶんさけたように見えるから、などの説があります。生きた化石かせきともいわれるほどのオオサンショウウオですが、その数は減へっています。オオサンショウウオが生きてゆける川の自然しぜんが少すくなくなっているからでしょうか。旭川あさひがわは長さ142キロメートル、岡山県おかやまけんで一番大きな川じょうりょうですが、その上流部湯原町あたりはオオサンショウウオの生息地せいそくちとして有名なところで、町の「はんざきセンター」ではオオサンショウウオをみることができます。また「はんざき大明神だいみょうじん」の祠ほこらもあり毎年8月8日には「はんざき祭まつり」がおこなわれています。

# やまたのおろち

島根県 豊伊川

むかし、むかし、スサノオノミコトとい  
う名の神さまがいました。スサノオは氣  
があらく、らんぼうものだというので神  
さまの世界からおいだされ、出雲の国  
(今いしまねけんのあたり) のヒの川(かわ  
斐伊川) のほとりにおりてきました。

スサノオが草をかきわけ川のほとりを  
あるいていると、なにやら川上から流れ  
てきます。よく見るとそれは箸でした。  
「うむ、川上には人が住んでいるにちがい  
ない」  
スサノオが川をさかのぼっていきます  
と、おもつたとおり人家がありました。  
家のなかでは、美しい娘をはさんで  
年老いた夫婦がしくしく泣いています。  
スサノオはふしきにおもつてたずねました。  
「これ、おまえたち、なにが、かなしくてな  
いでいるのか」

「はい、じつは、まい年この山おくからヤマ  
タノオロチがやつてきては大あばれをしま  
す。八人いたむすめたちは、そのつど食べ  
られて、すえむすめ一人になってしまいま  
した。今年もそろそろオロチがやつてくる  
ころです。すえむすめも食べられてしまう  
のかとおもうと、かなしくて、しかたがな



いのです」

「それは、きのどくなことだ。なんとか、たすけてやりたいが、  
そのオロチとは、どんな怪物なのだ」

「はい、それはそれはおそろしいオロチです。目はホオズキの  
よう赤く、ひとつのからだに八つの頭と、八つの尾をもつ  
て、あかく、ひつのからだにやつの頭と、やつの尾をもつ

ています。そのからだにはコケや木がおいしげついて、し  
かも、その大きさは八つの谷、八つの丘をまたぐほどです」

「ううむ……」

さすがのスサノオも、考えこんでしまいましたが

「オロチが、やつてくるところに垣をつくり囲みなさい。そし  
て垣には八つの門をつくり、それぞれの門の中にはタルをお  
き、酒を入れておきなさい」

夫婦は、いわれたとおりにしました。

しばらくしたある日のことです。空いちめんに黒い雲がたれ  
こめて、山おくでピカピカッといなずまがはしり、ゴロゴロつ  
と、かみなりがなり、はげしい雨があめがふきつけはじめました。

やがて地の底からわきだすような、ぶきみな音とともに、  
するどいキバをむきだし、八つの首をくねらせながらオロチ  
はどんどん近づいてきました。そして囲いを見つけると、八  
つの門をくぐりぬけ、八つのタルに八つの首をつつこんでき  
ました。そして、がぶがぶと酒をのみました。

あれくるつていた、さしものオロチもそのうちに酒に酔  
つてきます。しだいに動きがにぶくなつて、とうとう、ね  
むつてしましました。

「いまだ」

スサノオは、つるぎをぬくとオロチに飛びかかり、切り  
殺してしまいました。さいごに尾を切りつけたとき、尾の  
中から、りっぱなつるぎができました。

こうしてオロチはたいじされ、斐伊川の流れはオロチの血  
でまつかにそりました。たすけられたむすめの名は、クシ  
ナダヒメといいました。スサノオノミコトはクシナダヒメと  
結婚し、出雲地方の王になつて「クニ」をおさめました。



## やまたの大蛇とは、実はあばれ川のことだった

このお話を、古事記や日本書紀にてくる神話です。ヤマタノオロチが川だつたなんて、いつたいどういうことでしよう。まず、斐伊川の川全体の姿を想像してください。上流で合流する支川が尾、一本になつてくねくね流れる部分が胴体、そして河口部のデルタで分れる派川が首、と考えると、ヤマタノオロチそつくりです。斐伊川の上流部は、砂鉄の産地です。昔からここに砂鉄は「たら製鍊」といつて日本刀の材料にもなつてきました。砂を流し砂鉄を沈澱させてとる力

ンナ流しによつて、川ぞこが砂鉄をふくんだ砂で赤さびの色になります。切られたヤマタノオロチの尾からツルギができたり、その血で川が赤くそまつたり、まさに斐伊川はオロチそのものです。

美しい娘の名はクシナダヒメ。漢字にすると奇稻田姫（くしなだひめ）と書きます。つまり娘とは田のことでした。斐伊川の洪水が毎年のように起こり、たんせいこめて育ててきた稻田を、一つまた一つと流し去つていのでした。そこで、スサノオノミコトは策をたてました。まず垣をめぐらしました。これは堤防だと考えられています。八つの門は堰、八つのタルはため池で、洪水（ヤマタノオロチ）をここにみちびいて勢いをやわらげたのだと考えられています。切りさいた尾からツルギができましたが、川の上流で刀の材料になる砂鉄がとれることを考えると、なるほどとうなづけます。さて、スサノオノミコトはクシナダヒメと結婚します。これは、治水に成功し、地域の人々の尊敬をあつめ、この地を治めるようになつたことを意味していると考えられています。水害に痛めつけられながらも、洪水とたたかい、土地を守つてきた古代の人々の姿を表現した神話だと解釈されています。

斐伊川の現在の長さは一五三キロメートル。島根県東部、船浦山から流れると、いくつもの支川をあつめながら、杉など木々のおいしげる深い谷間をぬけ、出雲平野をつらぬき、現在は宍道湖にそいでいます。（むかしは日本海に直接そいでいました）



# きつね岩

広島県

太田川

むかし、太田川が八木城山のすぐふもとを、とりまくように流れていたころのことです。

そこでは、川のまん中に大岩がつきだしていて、太田川の早い流れは大岩にあたり、しぶきをあげ、うずまいていました。太田川を行き来する舟が一番おそれたところです。ある時、その大岩にへんなうわさが立ちはじめました。

「あんた聞いたかよ、可部から米を運んできた船頭さんも、大岩にあたってしづんだらしい。それだけじゃないぞ、今日も上流の加計からきた舟が大岩にくだかれで九人もの人が流されたんじや。うそじやないぞ、わしは梅林の川原までいって、たすかつた人に聞いたんじや」

「へえ、その人、なんていうとつた」

「夜だというのにあの大岩にな、きれいな女が立ちあ

るともしづんだんじや」

「なんとまあ、きみのわるい話じやな」

「そんなうわさは香川勝雄とい、おさむらいの耳に

も入りました。

「うむ、それは、ばけもののしわざにちがいない。これ以上させいしやがでないうちに、たいじせねばなるまいて」

ばけものたいじを決心した勝雄はその夜、たつた一人で太田川に舟をだし、ぎいこ、ぎいこと舟をすすめていきました。

すると、大岩に近づくにつれ急に天気がわるくなり、風がひゅうひゅうと音をたて、雨にまざつて雪までがふきつけてきました。川もあれだして、舟ははげしくゆれながら、大岩に向かつてすいこまれるようにな流れはじめたのです。

「これは、ただごとではないな」



勝雄が心をひきしめたときでした。とつぜん、あらわれたのです。すぐ目の前のくらやみに、カラカラつとわらう女のすがたがはつきりと見え、舟はみるみる大岩に近づきました。

「こいつだ」

と、とつさに勝雄はもつていた舟のカイを「えいっ」とばかりにふりはらいました。「ぎやあっ」と、ひめいが聞こえ、ざぶんと水音がしたかとおもうと、舟は大ゆれにゆれました。するどどうでしよう。今まで、あれほどはげしくふいていた風も雨や雪も、とつぜんやんで川はしづかになりました。

さつきの女のすがたもなく、川面に月がゆらゆらゆれて見えるだけでした。勝雄はゆっくり舟を岸辺につけました。

「うむ、やつぱり、ばけもののしわざだったか。もうこれで、安心じや」

勝雄は家に帰りふとんに入りました。しばらくねたでようか、なにかみような、胸さわぎがして目がさめました。とんとん、とんとん、だれかが戸をたたいています。

「この夜ふけに、いつたい、何者じや」

勝雄は刀をかた手にもち戸を開けました。まだ外はまづく

それからというもの、ばけものは、あらわれなくなり、太田川の船頭たちは、舟を大岩にぶつけることもなくなつたということです。

### 太田川と今も残るキツネ岩

太田川の難所にあつたというキツネ岩は、広島県、八木小学校の校庭に置かれています。この岩がほんとうに船頭さんたちを困らせたキツネ岩かどうかはわかりませんが、昔の太田川は、今よりもずっと八木小学校の近くを流れています。この辺りは、むかしは洪水があふれやすい場所で、川の位置も洪水によってかわることがあつたようです。そうしたところが難所でした。ここでいう難所とは、舟にとつて危険な場所のことです。トラックや鉄道がない時代では物を一度にたくさん運ぶのには、舟にたよるしかありません。太田川でもたくさんの舟が行き来していました。

お話を聞くと、太田川のずっと上流にある加計の船頭さんが人を大勢乗せてへだつてきましたことになっています。加計からキツネ岩のあつたところまでは平地がほとんどなく、山の間を流れる太田川は急流で、船頭さんは緊張の連続だったのでしょう。そして大きくカーブしてやつと平野にでるところが難所だったのです。平野を目前にして船頭さんが油断しないようにとの思いから、こんなお話をできたのかも知れません。現在の太田川は長さ一〇三キロメートル、中国山地の冠山から流れ下り、広島市から瀬戸内海にそそぎ出ています。



らです。しかし、よく見ると庭さきのくらがりに、うつくしい女のすがたが見えました。

「わたしは稻荷山のふもとにすむ、吾平のむすめでございます。今夜、父がころされました。そのあだうちをお願いにまいました」

勝雄は、これはあやしいと思いましたが、そんなそぶりは見せないで、ゆっくりと庭におりて女に近づこうとしました。ところが女は、あとずさりしてしまいます。

「もう少し、くわしく聞きたいのじや」

そういうながら女に近づこうとしたときでした。うしろのほうで、すうう、すううと、なにか聞こえています。勝雄は、とつさに刀をぬくが早いか「えいっ」とばかりに切りはらうと「ぎやあっ」というひめいがしました。ふりむくと、そこには何もいませんでした。女のすがたも消えていました。あくる朝、庭を見ると血のあとがでんてんとつづいています。勝雄がそのあとをたどると稻荷山のうすぐらい竹やぶのおくで、あらい毛をした大きなふるぎつねが死んでいました。

勝雄は、お経あげ、ていねいに、とむらつてやりました。



# ゆめづけ地蔵

徳島県 吉野川

むかし、吉野川の下流（今いきゅうよしのがわ）に南古田（みなみこた）という村（むら）があった。吉野川は南古田の手まえで二つに分かれ、田んぼごと村を丸くかこむように流れでおつたから、村では水不足（みずぶそく）でこまつたことがない。しかし、ひとつ大きななやみがあつた。それは大雨（おおあめ）が降るたびに洪水（こうずい）が起り、田んぼや家（いえ）が流されることじや。

「もう、わしらの力（ちから）ではどうにもならん。お地蔵（じぞう）さんにお願（ねが）いして、洪水（こうずい）から守（まも）つてもらつてはどうじやろか」

そこで村人（むらびと）たちは、はすの葉（は）をかたどつた石（いし）の上（うえ）に、ゆつたりとすわつたお地蔵（じぞう）さんをこさえて、土手（どて）のふちにまつったんじや。そのおかげで、それからというもの洪水（こうずい）でこまる



「ありがたいことじや、ありがたいことじや」

ところが、何事（なんごと）もなく年月（ねんげつ）がたつうちに、いつのまにか村（むら）の人たちはお地蔵（じぞう）さんのことを気にとめなくなつてしまつた。

そんな、ある日のことじや。しょぼしょぼ降（あめ）りだした雨（あめ）がぱいじやつた。

ま夜（よなか）中（なか）ごろから急（きゅう）にはげしくなつてな、吉野川（よしのがわ）へ流れこみ今（いま）にも川（かわ）の水（みず）があふれそうになつておつた。そうとは知（し）らず、村（むら）ではみんな、ぐつすりねむりこんでおつたんじや。その時（とき）くらやみの向（むか）のから

「土手（どて）が切れるぞ、土手（どて）が切れるぞおつ」

と、びっくりするほど大きな声（こゑ）がひびきわたつたんじや。村（むら）人はみんな飛び起き、あわてて外（ほか）へでると、だれより早く飛びだしてきた若者（わかもの）がいてな

「いそげ、高台（たかだい）の光蓮寺（こうれんじ）が安全（あんぜん）じや、光蓮寺（こうれんじ）へげろ」

と、さしつれておる。みんな、むちゅうで走（は）りに走つてどうにか光蓮寺（こうれんじ）にたどりつくことができたんじや。ところが、ほつとするまもなく

「土手（どて）が切れたぞ、土手（どて）が切れたぞ」

と、びっくりするほど大きな声（こゑ）が、また、ひびいてきたんじや。見（み）ると、土手（どて）が切れて川（かわ）の水（みず）があふれだし、みるみるうちにあたりはどろ海（うみ）のようになつてゆく。そのとき、何（なに）を思（おも）つたのかさつきの若者（わかもの）が切れた土手（どて）にむかつて走（は）りだしたんじや。





「おい、そつちはあぶない。どろ水ながに流されるぞ、もどれ」

みんなは、さけびつづけたが若者はふりむきもせず暗やみのなかに消えていったんじや。みんなは、がつくりして、すわりこんでしもうた。

ところが、しばらくして坂の下から、のつしのつしと重い足音が近づいてくる。よく見るとさつきの若者じや。せなかに地蔵さんをしばりつけな、どろんこになりながらも元気にもどってきたんじやよ。

「よかつた、よかつた、それにしても、どうして命がけでお  
地蔵さんを運ぶ気になつたんじや」

光蓮寺のおしおうさんが、ふしきにおもうてたずねると、  
若者はにっこりうなづいて話はじめた。

お地蔵さんがあらわれて土手があふない  
光蓮寺の高台が安全じや、といいますねん

「お地蔵さんのおつげやからと、心の用意こころ よういをしてたので、まご

いつたんじや。

「よろしいとも、よろしいとも、光蓮寺こうれんじがお気にめしたのなら、いざ」こちのよいお堂どうをた建ててしんぜましよう

やがて、お地蔵さんにびつたりの、かわいいお堂ができあ  
がると、あらふしげ、あれほど動かなかつたお地蔵さんが、

かるがると動いてな、お堂にちゃんとおさまったんじやよ。  
村人は、このお地蔵さんを「ゆめつげ地蔵さん」とよぶよう  
になつて、いまでも光蓮寺に大事にまつられとるんじや。

いため言ふれどお坊さんへい轉りては  
ことができるのではないか。」

この地には、ゆめつげ地蔵だけではなく、独特の変わったお地蔵さんがあります。「高地蔵」と呼ぶるもので、高い石の台の上に座つたお地蔵さん

です。たびたびおこる洪水にも流されないように、がつしりした高い台座みなそだいをつくるようになつたということです。お話にある南古田村は、今いまの北島町のことです。きみよしのがわ旧吉野川きゆうよのかわぞいにある光蓮寺の現在の場所は高台たかだいではあります。新しく建て替えられたお堂どうがありました。お堂の床は、おとなの胸むねくらいの高さに造られており、その高い位置いちに座すわつたゆめつけ地蔵じぞうさんは、赤い頭巾ずきんに赤いよだれかけをかけて、いかにも満足まんぞくそうに見えま

した。  
さて、吉野川は四国三郎とも呼ばれ、長さ一九四キロメートルの四国一大河川です。

## 吉野川の洪水が生んだお地蔵さん



つかず、みんなを光蓮寺こうれんじにつれてこれたんですね  
「なるほど、そのありがたいお地蔵さんじぞうさんが流ながされてはこまるか  
らと運はんだんじやな。ところで土手どてが切れるぞう、とか、

土手どてが切れたぞう、と、びっくりするほどの大声おおごえで知しらせたのは、だれじやー

「お地蔵さんじや、お地蔵さんにちがいない」

洪水もおさまり、いく日かして村人たちは、こわれた土手を直して、お地蔵さんをもとの土手のふちに、もどすことに

したんじや。  
ところがな、ふしぎなことにお地蔵さんじぞうが動かんのじや。

「どうやらお地蔵さんは、さびしい土手つぶちがいやじやと、  
だだをこねておいでのようじや」

「おしおうさん、お地蔵さんをこの寺においてもらえんかのう」  
おしおうさんは、にこにこしてお地蔵さんにむかってこう

# ひようけまいり

香川県 香東川



三百年前ほども、むかしのことです。

高松の殿さまのけらいに矢部平六という、さむらいがありました。そのあちらこちらを毎日のように見まわつておりました。その中に浅野とよばれるところがありました。平六はこのあたりに来ると、いつも心をいためるのです。ここには田んぼはどこにも見あたりません。やせた畑があるだけで坂の多いあれ地ばかりです。

「今年の作物のできぐあいはどうじやな」

「ははい、それがそのう」

平六に声をかけられた百姓は、言葉につまつてしましました。年貢をおさめることも出来ないほど不作だったからでした。平六は、ここらあたりの村人の苦しみは、よくわかっていました。アワとかヒエがせいいっぱいで、白いごはんなど食べたこともない者ばかりでした。

「のうおまえたちも百姓なら田をひらき、米をつくつてみんないか。そうすりや白いごはんも食えるようになるぞ」

百姓は、びっくりして

「そうじや、そうじや、わしらも手伝いに行こう」

そして毎日あせみどりになつてはたらきました。やがて、香東川からの水路が完成し、できあがったため池は新池

となづけられました。おかげで、あれ地はつぎつぎとひらかれ水田となり、やがて稻穂(いなほ)がみのり、白いごはんを食べるこ

とができるようになったのです。

「お奉行さまに足をむけてねたらバチがあたるぞ」

「平六さまは、わしら百姓の神さまじゃ」

百姓たちは、平六のすがたを遠くで見ただけで、手を合わせて、おがむほどになつたのです。

ところが、さむらいの中には、ひょうばんのよい平六を、ねたむものがでてきました。高松のお城では

「殿、矢部平六は、あちこちに水路をめぐらしておりますが、敵とつうじて、高松城を水せめにする時の準備をしているものとおもわれます」

などと、ありもしないつげ口をするしまつです。ほんとうのわけを知らない殿さまは、すっかりはらを立てしらべもないで平六をとらえさせ阿波(今の大島県)へおいやすてしました。これを知った百姓たちは、じたんだをふんでく

「ほんまかいなあ、そりや、ありがたいことじや」

「わしらのためじや、このまま、だまつて見とるわけにはいかんぞ」

「ひようけまいり

「お奉行さま、そりやむりといふものです。あの香東川から水を引けないかぎり、田をつくるなんてゆめの話です」

「しかしのう、あの川から水が引けるかもしけんぞ。いずれ、ゆめかゆめでないか、わかるときがくる」

しばらくしたある夜のこと、浅野の村は大きさわぎになつていきました。

「ひひとだまのぎょうれつじや」

「あれはキツネのよめ入りじや」

「何かのたたりじやあるまいかのう」

「村人がおどろくのもむりはありません。夜のやみの中、

浅野の南から北のはしまで、いちれつに、てんてんと火がならんでいるのです。そのわけを、ただ一人、平六と話をした百姓だけは、なんの火かわかりました。

「みんな心配せんとええ。あれはな、お奉行さまが、ため池をつくるため、ちょうどんをもたせて土地の高い低いを、しらべなさつとるのじや」

「ほんまかいなあ、そりや、ありがたいことじや」

「わしらのためじや、このまま、だまつて見とるわけにはいかんぞ」

やしがりました。

「なんてひどい殿さまじや、うそつぱちのつげ口をまにうける  
なんて、あいた口がふさがらんわい」

こんなわる口が、殿さまのけらいに知れたら切りころされ  
てしまいます。百姓たちは、かくれてこつそり話をしました。

「わしらは、どんなことがあっても、お奉行さまのご恩をわす  
れるわけにはいかんぞ」

「じゃが、平六さまの名を、だしただけでも、おとがめをうけて  
てしまふぞ」

「いいことがある、平六さまを神さまにしてまつるんや、水神  
さまといっしょにして、わしらが平六さまを、おがんでること  
を、気づかれんようにとほけるんじや」

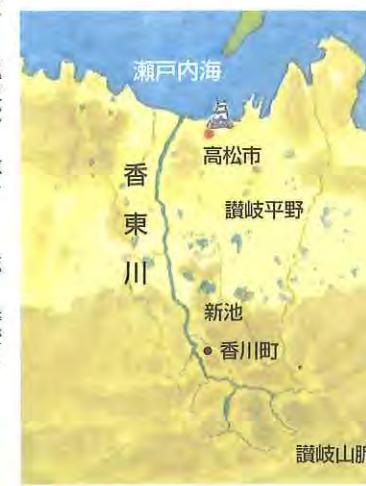
そして、みんなで知恵をしづり、わざとへんてこりんなか  
つこうをして、わざとおどける、なんともふしぎなお祭りが  
できあがりました。お祭りは、ひょうばんになりましたが、  
百姓たちの平六をおもう心の中は、ほかのだれにもわかりま  
せんでした。このひょうきんなお祭りは「ひょうげまつり」  
とよばれるようになり、今でもつづいているのです。



### 川から水をひいてたくわえる

このお話は、かんがいのお話です。香川県の讃岐平野は昔から、夏の水不足にはたいへんなやまされました。ですから讃岐平野には、弘法大師が改築したといわれる大きなため池「満濃池」をはじめ、大小あわせてかぞえきれないほどの、かんがい用のため池がつくられています。お話の新池も、その一つです。瀬戸内海に面した高松市から香東川を一〇数キロメートルさかのぼった香川町に新池があります。浅野地区とよばれるこのあたりは、上地の高低が激しいあれ地だったそうで、香東川から水をひくためにはたいへん苦労したことでしょう。

「ひょうげる」とは、おどけるという意味だそうですが、このおどけたお祭りは、今は香川県の無形文化財として受けつがれ、毎年九月には、秋まつりのさきがけのようにと  
り行われています。まつりの神具一式は農作物からつくられ、ぜいたくなものは一切なく、手づくりのものばかりです。  
香東川は讃岐山脈から渓谷を流れくだり、香川町あたりから讃岐平野にすると、ほぼま  
つすぐ瀬戸内海にむかって流れる長さ約三二キロメートルの川です。新池のほかにも、い  
くつかのため池をうるおし、讃岐の水田を守りつづけているのです。





# たぬきの紙すき

高知県

仁淀川

四国しこくの土佐とさといえは、むかしから和紙わしづくりで、有名ゆうめいなど  
ころじや。どこの紙かみより、うすくてじょうぶなのが自慢じまんで  
な、作り方は何百年かたなんびゃくねんもむかしから秘密ひみつにされておつて、  
秘密ひみつをもらしたものは殺ころされるほどだつた。

さて、三百年ほどもむかしのことじやが、紙すきの里とし  
て知られた成山村の新助が、加田村の伊五六じいさんの家に  
養子にいった。その時も成山の庄屋どんに

一  
は  
して  
紙すきの秘密はもらしません  
といふ  
うもん  
か  
うもん  
か  
た  
うや  
どんも

「ぜつたい紙すきの秘密を聞きだしたりしま  
う」という証文を書かされたほどじやから、加か

この村でも、紙のつくりかたを知るものなど一人としておらなんだ。ところがある日のこと、伊五六じいさんが、へ

「新助や、中タン竹やぶでな、夜になるとタヌキがんなうわさを聞いてきた。

て、紙すきをしよるらしい、まい晩じやそうな」

らだけだ。おらは、だれにも教えていないし、ましてタヌ

カミ

「うそじやとおもうなら、たしかめに行つたらどうじや  
キなんぞに絶すきができるわけがない」

そこで新助は中タン竹やぶにたしかめに行くことにした。

とるのじやろう。ひとつ、しつぽをつかまえてこらしめて  
やるわい」

んでおつた。どちらの竹やぶも洪水の時、水のいきおいを弱めるためのものじやから大きな竹やぶでな、昼でもうす

ぐらくて、さみしいところじやつた。夜になつて新助と

伊五六しいさんは、これこれと中タン竹やぶのおくへ入っていった。しばらくいくと、タタン、タタンと音<sup>おと</sup><sub>き</sub>が聞こえていた。

じょうなかつこうをした何人かがあつまつて、紙書きをして  
てきた。わずかな月あかりに目をこらして見ると、村人と同  
じようななかつこうをした何人かがあつまつて、紙書きをして

「うわさどおりじや、それにしてもタヌキのやつ、うまくばけたもんじやな。しかしタヌキは自分のことを「おら」と

はいえず「うら」<sup>はな</sup>としかいえないから、話かければすぐ、ばけの皮が、はがれるはずじゃ」

新助はどうぞきしながらも、なかまのような顔をして近づいていった。そして手伝うふりをしながら、しつぽがでていなかいか観察をしたがどこにもでておらん。みんなまじめ顔で紙の原料のコウゾの皮をたたいたり、川の水にさらしたりしちよる。ところがどいつもこいつも、ぶきつちよな手つきで、なつちよらん。新助は見ていくうちに、おもわず笑いだしてしもうた。

「はははは、こりやだめじや、なつちよらん」

びっくりして、みんなは手をとめたが、その中のぎよろ目めの男が

「どこがなつちよらんのじや。紙すきの仕方も知らんくせに」と目をむいた。そういわれては新助もだまつてはおれん。「成山の紙すきは、こうやるんじや、よう見どれ」

そういうが早いか新助は、トントントンツと、コウゾの皮をたくとところから、手ぎわよく紙をすいて見せた。

みんなは、目をまんまるにしておどろいた。そしてすぐに

新助のいつたとおりに紙づくりにせいをだしはじめた。なかには、きれいなむすめもおつてな

「ここは、どうすりや、いいのですかいのう」

などと聞きにきよる。新助は、得意になつて成山の紙すきの秘密を、ぜんぶ教えてしもうたんじや。

「あんたは、たいしたもんじや、なかまに入つてくれや」

ぎよろ目の男がすすみでて新助にたのんだ。新助はあわてた。

「しまつた。秘密をぜんぶ教えてしもうた。しかし、あいてはタヌキじや、人には教えちよらん」

そうおもつたが、心配になつて聞いてみた。

「おら、うらじや」

そのへんじに新助は、何がなんだか、わからなくなつた。しつぽはないし、「おら」とも、「うら」ともゆうし、すっかりタヌキにだまされたような気持ちになつて、ふらふらと家に帰つてきた。それから、またたく間に加田の村中に紙すきがひろがつた。これを知つた成山の庄屋どんは、かんかんにおこつて、加田の庄屋どんの家へどなりこんできた。

「おぬし、わしとの約束をうらぎつて、新助から紙すきの秘密を聞きたしたな」

しかし加田の庄屋どんはすました顔で答たそじや。

「いやいや新助からは、なんも、きいぢよらん、タヌキにおそわつたんじや。中タン竹やぶにいつてみると、コウゾの皮をうらじや」というタヌキたちが、まい晩おしえどるのよ」

成山の庄屋どんは、何やらタヌキに、だまされたような気持ちじやつたが、頭の中がこんがらがつてしまふてな、首をかしげかしげ帰つていつたそな。

### 仁淀川は和紙の川

昔から、川は産業とも深く結びついています。このお話を仁淀川とむすびついた和紙と人々のくらしが、おおらかに語られています。

す。土佐の和紙は、美濃(岐阜県)の紙や

越前(福井県)の紙、石州(島根県)の紙などとともに、日本の代表的な和紙で、それぞれに独自のすぐれた特徴をもつています。

うした紙の製法は、昔はよその地に、もれな

いように秘密にされていたようです。土佐の

紙づくりも土佐藩がきびしく保護していました。話では、命をかけて紙づくりを大切に育て、必死に守り伝えてきた人々のくらしを、うかがい知ることができます。

その反面、江戸時代、土佐藩御用紙すきの家に生まれた古井源太という人は、和紙づくりの技術向上に努力し、私利をかれりみず広く和紙づくりの普及につとめています。このように、きびしさの中にも、いかにも南国土佐らしいおおらかさが、とほけた明るいお話を生んだのかもしれません。

仁淀川は、西日本一の高さをもつ石槌山から流れだし、高知市の西で太平洋にそそぐ二四キロメートルの長さの川です。流域の九五%が山地です。つまり、仁淀川ぞいには平野部が少なく耕地も少ないのです。じゅうぶんな耕地を持てない農民たちの知恵が、豊かな水量の川を利用して、紙すきを発達させたのでしよう。

しまつた。



# 筑後川と五庄屋どん

福岡県 筑後川

むかし、ほんとうにあつた話じや。

筑後川の中流あたりに生葉といふところがある。このあたりの土地は高いところにあってな、目の前を流れる筑後川の水を引くことができない。だからいつも水にはこまつておつた。

「わしの村では食うものがない、草の根まで食べるとよ」「いまいましか、筑後川にはたっぷりと水があるのに、ここに引けんとはのう」

「このままじや、このへんの村はぜんめつたい。こうなりや、ここより高い川上の村から水路ばつくつて、筑後川の水を引くしかなかとよ」

「ばつてん、川上の村の大反対も起ころるじやろう」

「そげなこといつとれん。藩のお奉行さまもなつとくする計画をつくつて、こんどこそ水ば引くんじや」

「そうじや、命をかけてもやりぬくたい」

五人の庄屋どんは、今まで何回も計画だおれになつていた案を今度こそやりぬこうと血判までつくり誓いあつたんじや。

うわさがひろがると近くの村々の庄屋どんたちがだまつてはいない。

「水を引くつてほんとうか、わしらの村も水にこまつとるばつてん、なかまに入れてほしか」

そこで仕方なく、なかまにすることにした。庄屋どんはぜんぶで十一人にもなつた。ところが今度は、川上の庄屋どんたちがけつそうかえて、さわぎだしたんじや。

「なんばぬかしとる。わしらの村の土地をほつて、自分の水路にするなんぞゆるせんばい、土地どろぼうたい」

「それだけじやなか、筑後川に大水でもあれば、その水は水路からあふれるにきまつちよる。まつさきにやられるのは、わしらの村みたい」

「ぜつたい反対じや。草一本さわらせんたい」

この大反対には藩の重役たちもこまつた。そこで重役たちは頭のよい奉行をえらび、しらべさせたんじや。しらべをおえたお奉行は、これだけの大仕事は、とても庄屋だけではやりとげられないと考えて、水路づくりは藩の仕事にすることにした。そして川上と川下の庄屋どんたちをあつめて、こういわわたしたんじや。

「まず川上のものにいいわたす。おまえたちの土地は、もとも





んがそろつて前にすすみでた。

「お奉行さま、失敗したらわしらが責任をとります。はりつけでも火あぶりでもかまわんとです。お金もぜんぶわしらがだします。かくごはできとるとです」

「そうか、その言葉しかと聞いたぞ、みんなのものも聞いたであります。五人の庄屋を生かすも殺すもみんなの協力しだいじや」

そして、村の入口には、さっそく、はりつけようの柱が五本たてられた。それを見た村人たちとは、「庄屋どんをころすな

と藩の土地じや。水路づくりは藩のためじや、ぜつたい反対

してはならぬ、よいな」

「つぎに川下のものにいいわたす。おまえたちの村々に水を引ひく工事にはお金がたくさんかかるが、ぜんぶ自分たちでもつこと。もし工事にしつぱいすれば、責任者をはりつけの死罪にするがどうじや」

今まで、けいけんしたことがない大仕事に失敗したら殺すと聞けば、だれだつてしりごみする。そのとき五人の庄屋ど

ん運んでくる必要があつた。そこには山から大きな石をたくさんの人が一日もかかつたということじや。

庄屋どんのおかみさんたちは、自分のかみの毛をばつさり切つてな、それを神社にささげて祈つたそうじや。お奉行もあちらこちらから手伝いをあつめてくれた。反対していた村々の人たちまで手伝いにやってきて四万人の人が必死でがんばつた。

そして、いよいよ水を流す日がやつてきた。堰の水門がひらかれるとき、水はさらさらと水路をはしり、やがて、かわき

きつた生葉の村々にたどりついたんじや。

五人の庄屋どんの命をかけた願いがかなつたのじや。みんなは「ばんざい、ばんざあい」とさけびながら、おどりあが

つて、よろこんだそうじや。

もちろん村の入口にたてられていた、はりつけの五本の柱も、やきすてられた。それからといふもの、生葉の地だけでなく、水路のまわりには水田がたくさんできてな、有馬藩もうるおつたそうじや。



### 筑後川にいどんで土地をいかす

今からほぼ三百年余り前、江戸時代に実際についたお話です。この時代は大開發時代といわれるほど、日本の国土に水田がふえた時期です。江戸幕府も各地の大名もござつて土地開発に力をそそぎましたが、水がたっぷりなければ水田をひらくことはできません。あれ地を水田にかえるには、大きな川から水を引くしかないのです。ポンプなどない時代、このお話のように高い土地に水を引くには、より高い上流から水路をほつてくるしかありませんでした。

お話に出てくる生葉というところは現在の福岡県浮葉郡の吉井町から田主丸町あたり一帯のことで、水田がひろがる穀倉地帯となっています。かつて少しの日照りでも、たちまち干上がつたあれ地を今は想像すらできません。そこから一〇キロメートルほど上流に大石堰があります。長い年月の間には、何度も洪水でこわれたこともありました。現在の堰は近代的に復旧されたもので昔の姿ではありませんが、復旧工事のさい、あらためて三百年も以前につくられた堰や水門が、いかにりっぱであつたかが証明されたということです。地域の人々は、命をかけた五人の庄屋どんへの感謝と尊敬の気持ちを忘れないように、ちからずいに長野水神社をたてて五人の庄屋どんをまつっています。

お話の大石堰は山田堰・恵利堰と並んで筑後川の三大井堰とよばれています。筑後川の長さは一四三キロメートル、熊本・大分・福岡・佐賀の四県を流れ有明海にそそぐ九州の三大河川です。

# ひと こわい ぼり

福岡県

嘉麻川

三百年ほどむかしのこと。いまの福岡県嘉穂町あたりでは嘉麻川をはさんで、東側が黒田の殿さまの土地で、西側が秋月の殿さまの土地でした。

ところが嘉麻川は、黒田の殿さまのものだったのでも、東の黒田側では嘉麻川の水をたっぷりつかって田植えができますが、西の秋月側では嘉麻川の水をつかうことを、きんじらっていましたので、雨が降らなければ田植えもできません。

「天の神さま、どうか雨ば降らせてくだはりませ」

西の村人たちは、毎年のように雨乞いのたいこを打ちならし、神だのみするしかありませんでした。

ある年のこと、いつもの年より日照りがつづき、西の田は、からからにかわききてしまい西の村人はもう雨乞いのたいこをうつ氣力さえなくなつておりました。

この村には正人どんという医者がいましたが、そこへ村人が病氣でもないのに、つぎつぎとたずねてきます。

「正人どん、家中のみんながよわっちよる何とかしてほしか」

「ううむ、そういわれても良薬はなか。元気がなくなる原因は水じや。水さえあれば、みんな元気をとりもどすじやろうに」

正人どんは考えぬいたすえ

「人を守るのが医者じや、村人をすくうには嘉麻川の水をつかわしてもらうしか方法がなかけんね」

そういうつて、でかけるしたくをはじめました。

「秋月の殿さまからでさえ、聞きとどけられない願いごとを、おまえさまが申しでたりすれば無礼者といつて殺されるかもしません」

おくさんはなきながら、行かぬようたのんだが、正人どんの決心はかたく、黒田のお城へとでかけていきました。そして、お城の門前にすわりこんで、殿さまのかごが通るのをまちました。三日、四日とたちました。そして五日目、やっと殿さまのかごがでてきました。

「お殿さまにお願いがござりまする」

おとものさむらいに、無礼者と引きおさえられながら正人どんは必死にさけびつけました。その声は、殿さまにもとどきました。

「そうぞうしいが、なにごとじや、かごをとめろ」

正人どんは頭を地面につけたまま、必死で西の村の苦しみ





と申すか。ならば一くわはばだけをゆるしてとらせよう

正人どんが嘉麻川の水をつかうおゆるしの証文をもらつたというので西の村では大きさわぎでした。しかし、水を引くみぞのはばが、たつたの一くわはばと聞くと、がつかりしました。それだけの水ではとても村全体の水田に水をはることはできないからです。

しかし、正人どんによびあつめられた日、みんなは「おうつ」とおどろきの声をあげました。いつのまにつくらせたのか、正人どんがもつてきたくわはあるおおきなくわだつたのです。

「みんな聞いてくれ、証文には一くわはばとだけなつていて、くわのはばは、きめられてはおらんとです。さあ、今からこのくわで、みぞをほつてつかあさい」

「なんじやと、一くわはばの水路で、百姓三百の命がたすかる

をうつたえました。

「せめて、一くわはばの水を秋月の地に、おめぐみくださりませえ」

「なんじやと、一くわはばの水路で、百姓三百の命がたすかる

をうつたえました。

「せめて、一くわはばの水を秋月の地に、おめぐみくださりませえ」

「なんじやと、一くわはばの水路で、百姓三百の命がたすかる

をうつたえました。

「三尺はばの深いみぞがほられたことを知つた黒田藩のお役人は、かんかんになつておこりました。

「はかりおつたな正人め、殿のやくそくは、やくそくじやが、ばかりごとだけは、ぜつたいゆるせん」

まもなくお城から二、三人のさむらいが、まるで、かげのようすもなくでていきました。

あくる日、村人たちは、できたばかりのみぞの石橋のへりで、背中から、やりで、さし殺されている正人どんと、家の庭さきで切り殺されている、おくさんと一人むすこを見つけました。村人たちは、かなしみにくれながら、三人の墓を、西の村や田をみわたせる小だかい丘にたてました。

正人どんの恩はけつして忘れまいと、ちかつた村人たちは、この話を三百年たつたいまも語りつぎ、毎年八月七日の命日には、「正人どん祭」を行つてゐるのです。

### 嘉麻川と今ものこる一くわぼり

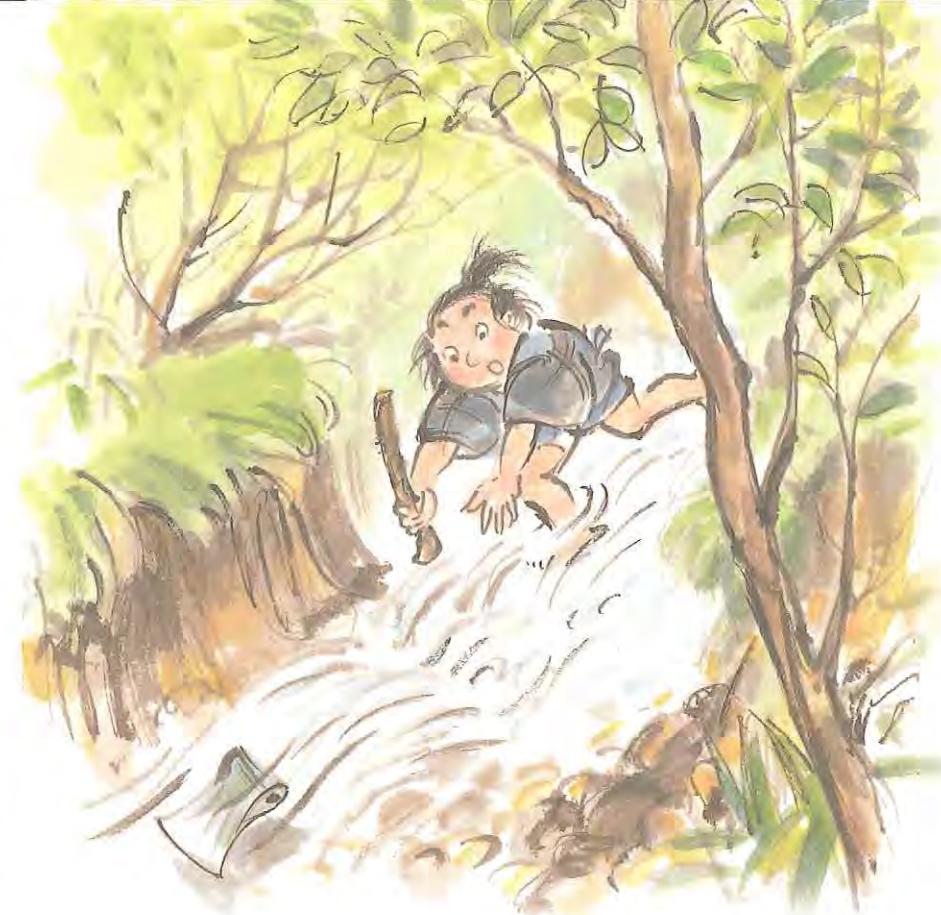


三百年前ほど昔のお話というと、ちよど江戸時代の初期にあたります。世の中がおちついて、各地の大名たちがござつて、新田をひらくために知恵をしぼつた時代です。大名の力で、大がかりで長い用水路を掘つたり、ため池をつくるなど、川の水を使うための努力がはらわれました。それだけに、川の管理もきびしく、農民が勝手に水を引くことなどできません。水の配分をめぐる農民どうしの争いも各地で起きました。農民にとって、川の水を使えるか使えないかは、天国と地獄ほどの差があつたのです。たとえ一メートルにみたない小さな用水路でも、人々にとつてどれほど大切なものが、ひとくわぼりのお話からもよくわかると思います。

お話でてくる嘉麻川は、遠賀川の上流にあります。福岡県のほぼ中部を縦断して流れる遠賀川の長さは六一キロメートル。二千年前の昔からこの地に稲作文化を育て、現在も筑豊地帯の水田に水を運びつづけています。正人どん一家の墓をたすね、細い山道をのぼると、林の中に太い木を背に三つの墓石がよりそうように、ひつそりとたつていました。墓のまわりは、はき清められ三つの竹筒に花がいっぱい生けられていたのが印象的でした。

# なたとり淵

宮崎県 田原川



むかし、高千穂とよばれる山あいの村に、小太郎という百姓がすんでおつた。ある日、小太郎は田原川のへりで、たきぎにする木を切っておつたが、どうしたはずみか、なたの刃がスパンとぬけて川におちてしまつた。沢は、せまいし、あさいから、とるのはかんたんだ。小太郎はジャブジャブと川の中に入り、なたの刃をとろうとした。

ところが、手がふれようとしたとたん、なたの刃はフワリとういて2メートルほど川下に流れてとまつた。

「ややや、こりやまた、どうしたこつた」

鉄のなたの刃が木の葉のようにフワリとういて流れるなんて、そんなばかなことがあるわけがない。小太郎は目をパチクリさせながら、なたの刃がとまつてているところへいき、しつかりたしかめてから手をのばした。

「ややや、どうなつとるべ」

なたの刃は、また小太郎の手をするりとぬけ、フワリと流れとまつた。

「なたの刃までえ」

小太郎は、むきになつて、おいかけはじめた。しかし、そのつど、なたの刃はフワリフワリとにげるようになつてゆく。

が見えた。

「ここらへんでは見たことない、りっぱな馬じやが、だれかが、しだいに目をまんまるに見ひらいて、口をポカンとあけあつけにとられてしまつた。馬にのつていたのは小太郎だった。小太郎の方も、おどろいてたずねた。

「どうしたんじや、おおぜい人があつまつていのう」

みんなは、えんがわになつて、近づく馬を見ておつたが、しだいに目をまんまるに見ひらいて、口をポカンとあけあつけにとられてしまつた。馬にのつていたのは小太郎だった。小太郎の方も、おどろいてたずねた。

「いやあ、それがの、なたの刃をおいかけて竜宮淵にもぐつたんじや。すると、なんともりつぱな竜宮でな、そこで、さんざんもてなされ、ついつい三日も遊んでしもうた。帰る時に二つの玉と馬をくれたんじや」

「それはうそじや、おめえがいなくなつて三年もたつた」

「そりやおどろきじや。だども、うそはついてないぞ」  
小太郎はその証拠に、かがやく二つの玉をだして見せた。  
「こちらが雨を降らせてくれる日どり玉、こっちのほうは、雨をとめてくれる水どり玉じや」

この世のものはおもえない、かがやく玉を見て、みんなえんがわからは、のどかな山にはさまれた、ほそながい田んぼと田原川のくぼみが見える。その小道を、白い馬につた、だれかが、こちらへ向かつてのんびりとやつてくるの

やがて、川は大きな滝になつた。滝の下は竜宮淵とよばれる底なしの淵で、村人もめつたに近よらないところじやつた。そこへ、なたの刃はポシャーンとおちて見えなくなつてしまつた。

「ええい、ここまできたんじや、なにがなんでも、さがしてやるわい」

小太郎は着物をぬぎすてると、ざんぶと、竜宮淵へ飛びこんでいった。

その夜、おそくなつても帰らない小太郎をさがして、村ではおおさわぎになつた。みんなで山も川もくまなくさがしたが見つからない。くる日もくる日もさがしたが見つからない。一年たち、二年たつても、やつぱり小太郎は帰つてこなかつた。どうとう、小太郎のおかみさんもあきらめて、泣く泣くそうしきをすませた。やがて、三年目の命日がやつてきた。小太郎の家では、お坊さんをよび、お経をあげてもらい、小太郎をなつかしんでおつた。

えんがわからは、のどかな山にはさまれた、ほそながい田んぼと田原川のくぼみが見える。その小道を、白い馬につた、だれかが、こちらへ向かつてのんびりとやつてくるの

もやつと小太郎の話を信じるようになった。

それから何年かすぎたある年、春さきから日照りがつづき、たのみの田原川も、すっかり干上がった。これでは田植えもできない。小太郎は、今こそ日どり玉をためす時だと村人をあつめ、雨乞いの祈りをはじめた。

「日どり玉さま、どうか、雨を降させてくださいませ」

すると、みるみるうちに、空があつい雲におおわれて、ざあざあと雨が降りだした。村人たちは大よろこび。ところが、よろこんだのもつかのまで、こまつたことに、くる日も、くる日も雨は降りつづき、田原川は今にもあふれんばかりになつた。

「このままじや、家も田んぼも流されるぞ」

村人は、おろおろするばかりだつた。

「さあ、今度は水どり玉をおがむばんじや」

小太郎は水どり玉をとりだすと、みんなにもおがませた。

「水どり玉さま、どうかどうか、雨をやませてくださいませ」

すると、あれほどはげしく降っていた雨がぴたりとやんで、みるみるうちに青空がひろがり、かがやく日の光が里いっぱい

いに、降りそそいだのだ。

それからというもの、小太郎の村では、日照りにも、大雨にもこまることがなくなつて、二つの玉は、村の大好きな守り神になった。そして、小太郎が飛びこんだ竜宮淵は「なたとり淵」とよばれるようになったそうな。



### 神話の里の小さな川、田原川

宮崎県延岡市から五ヶ瀬川をさかのぼつていくと、神話のふるさと高千穂町があります。山なみには白い雲がたなびき、いかにも神話の世界にふさわしい雰囲気がただよつています。「なたとり淵」の民話は、この高千穂を舞台にして生まれました。

小太郎が、たきぎをとりでかけた田原川は、五ヶ瀬川の小さな支川、河内川にそそぐ、さらに小さな川でした。この田原川にそつた細長い土地には、田畑がひらかれています。田原川は、これらの田畑に水を運ぶ用水路の役目をはたしていました。上流に湖や池をもたない田原川の流れはささやかでしたが、がんじょうに補強された两岸が、この川が雨によつてたちまち激しい流れになることを、物語っています。

つまり田原川は、天気の影響をうけやすい川で、日照りがつづくと枯れやすく、激しい雨にあうと、すぐにいっぱいになる姿をしています。昔、この地に住んでいたお百姓さんの暮らしは、いまよりもはるかに天候の影響を受けたことでしょう。日照りがつづけば、雨をふらせてくれる日どり玉。雨がつづけば、お天氣にしてくれる水どり玉。かなわぬ願いと知りつつも、「もし、こんな玉があつたらなあ」と願わずにはいられなかつた村人たちの気持ちが、こんなお話をつくらせたのかもしれません。

ともあれ田原川は、地図にもその名がのらないほどの小さな川ですが、今でもしつかりと役に立つ流れ、やがて長さ一〇六キロメートルの五ヶ瀬川に合流し、多くのアユを育て、どうどうと胸をはつて日向灘にそそいでいるのです。



# かっぱのくせんぼう

熊本県 球磨川

むかしむかし、わしら、かつぱの先祖は、中国のカラテンジュクというところで、くらしておつた。

そこは、中国でいちばん大きな川、長江の上流にあるんじやよ。ところが、かつぱがふえすぎてな、どこか、すむところ

を、かえようということになつた。

そこで、西洋へ行くグループと、東洋がいいというグループとに分かれたんじや。東洋がいいというグループでは、その中で、いちばん大きくて力の強い九千坊というかつぱがリーダーになつた。

そして、九千坊を先頭に、九千びきものかつぱのたいぐんが、長江をくだり海をわたつてな、やつと、たどりついたところが九州にある球磨川の河口じやつた。もちろん泳いできたんじやよ。だから、もう、へとへとじやつた。

しかし、球磨川を見たかつぱたちは、きゅうに元気になつた。球磨川の水は、すきとおつて、きらきらしているし、おまけに、かがやくような森の緑につつまれている。こんな、うつくしい川は見たこともなかつたからじや。

「ここは、まさに、かつぱの天国だよ。冷たい水はおいしいしこんなに、すみよいところはない。九千坊さまに、ついてきてよかつたよう」

かつぱたちは大喜びで、はしゃぎまわつた。なにしろ九千びきものかつぱが、さわぐのだから大変だ。うちょうてんに



なつて、人間のめいわくも考えず、畠をあらしたり、馬を川に引きこんだり、とんでもない、いたずらをするものもいる。人間にとつては大めいわくじやよ。

こまりはてた人間たちは、

「なんとかして、かつぱどもを、こらしめてください」と、肥後の國のお殿さまに、うつたえたんじや。そこで、お殿さまは、かつぱが苦手とするサルをいっぱいあつめ

「おもうぞんぶん、かつぱどもをこらしめよ」

と、命令したんじや。サルたちは、ここぞとばかりに、かつぱをせめたてた。これには、さすがの九千坊もまいった。

そして、とうとう、こうさんし、かつぱたちは球磨川から、おいだされてしもうた。しかたなく九千坊は、九千びきものかつぱをひきつれて、となりの國へゆき、筑後のお殿さまに、これからは、けつして、いたずらをしないと、やくそくして、筑後川にうつりすむことができた。筑後川は、九州一おおきな川で、かつぱたちは大満足じやつた。

その後、かつぱたちは、水難よけの神さまのお使いになつて、日本中の川で、はたらくようになつたといわけじやよ。

### 球磨川とかつぱ伝説

九州にはカツバの伝説や民話がたくさん残っています。九千坊の話もそのひとつです。

熊本県八代市の球磨川河口の川べりに、「河童渡来の碑」がたてられていました。その碑は、今から一六〇〇年も昔に、九千匹のカツバが中国からこの地に渡ってきたといいうい伝えにちなんだものです。

その昔、中國の吳といいう國からおおぜいの人々がやってきたという事実があつて、それを中國語の発音であらわした「オレオレデーライタ」という言葉がその碑に記されています。このように球磨川は、大昔から中国や朝鮮半島の人たちと交流のある川です。

その美しい流れの長さは一五キロメートル、急流ですが水量は豊かで、下流域に広い平野をつくってきた川です。かつぱたちが、うつりすんだという筑後川とともに九州を代表する川なのです。





### お話しとその舞台になった川の位置



■参考にさせていたいた本

「十勝川歳時記」北海道開発局帯広開発建設部 河川環境管理財団

「十勝川」北海道開発局帯広開発建設部 河川環境管理財団

「アイヌ伝説集」更科源藏 みやま書房

「河童の世界」石川純一郎 時事通信社

「アイヌ今昔ものがたり」穗積肇 兵庫県部落問題研究所

「地名アイヌ語小事典」知里真志保 北海道出版企画センター

「山形伝説考」鳥兎沼宏之 法政大学出版局

「日本のむかし話」永田義直 金園者

「ふるさとの民話」全国県別民話集全47巻 日本児童文学者協会編 偕成社

「ひょうげまつり」中原耕男編 香川町文化保存会・香川町浅野土地改良区

「わたしたちの古典1 古事記」長谷川孝士監修 学校図書

「物語日本の土木史」長尾義三 鹿島出版会

### ■取材に協力してくださった方がた

木造町役場

青森県実相寺ご住職

栖足寺ご住職

嘉穂町教育委員会

天狗岩堰土地改良区

古川市教育委員会

徳島県光連寺

福井原立図書館

伊野町和紙の里

広島県人木小学校

美濃町役場

吉井町教育委員会「大石・長野水道開鑿の話」

小杉義男氏「子どものための鹿沼のむかし話」

## 川の民話集

二〇〇六年一月一五日第一刷発行

企画発行 財團法人 河川環境管理財団

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町一-一-九

住友生命日本橋小伝馬町ビル

電話○三（五八四七）八三〇二（企画調整部）

FAX○三（五八四七）八三〇八

インターネットホームページ

<http://www.kasen.or.jp/>

印刷・製本 有限会社カウズ

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

企画・監修 財團法人 河川環境管理財団

有限会社アバンアート  
中村 信

自然科学絵本作家  
グラフィックデザイナー

